



Relive Journal

りらいぶ ジャーナル No.46

2023年 薫風号 (5月15日発行)

< “りらいぶ” 憲章 >

- 組織、肩書き、経歴にとらわれない自由な生き方
- 知識、経験、技術を生かして社会に貢献する生き方
- 初心に帰って新しい自分を発見する生き方

私たちNPO法人リタイアメント情報センターはこのような生き方を“りらいぶ”と呼び、
その生き方をサポートします

<目次>

- | | |
|--------------------------------|-------------|
| 1. 海外ロングステイを振り返って | (会員 渡嶋 八洲夫) |
| 2. バリ島チャンディダサの日々⑦ ブバンデムの牛市 | (会員 黒部 正也) |
| 3. バリ島チャンディダサの日々⑧ レンボンガン島の天草刈り | (会員 黒部 正也) |
| 4. 走行距離 60Km に | (会員 鳥居 雄司) |
| 5. 私の記録 (20歳代前半まで) パート1 | (会員 石尾 賢一) |
| 6. 「一大決心 全飼育頭数の約半数病死」 | (会員 赤神 潔) |
| 7. 事務局だより | |



1. 海外ロングステイを振り返って

(ロングステイの勧め)

(楽しい人生を求めて)

会員 元キャメロン会長 渡嶋ハ洲夫

海外ロングステイを始めたのが2000年ごろからであるが、コロナ発生までの2019年までは毎年夏・冬には海外ロングステイを楽しんできた。2022年脳血栓を患い再発を懸念してロングステイ中止のやむなきにいたった。20年間のロングステイの経験を振り返るとき「楽しかった思い出しかない」ので皆様へもロングステイをお勧めしたい。

(1) 2000年頃ロングステイ地の選定

定年後は海外ロングステイをしようと決め早速場所の選定がはじまった。国も海外ロングステイを奨励し情報も出していた。今も活動しているロングステイ財団も設立され情報を発信していた。

① 海外ではないが日本では夏の軽井沢

日本でのロングステイも考え1970年(昭和45年)頃には土地だけの手当てではしてあったが、その後海外ロングステイを優先したため土地は手放した。

② 南半球

日本と気候が逆であり、特に冬調査のため数回訪れた。

A ニュージーランド

日本と同様右ハンドルで、道もすいており、運転が容易のためレンタカーを空港でかりて北島、南島を民宿に宿泊しつつ駆け巡った。温泉地もあり、原住民の文化も残っており、物価はやや高いが、清潔さは抜群である。

多数のゴルフ場とテニスコートが安くプレー出来るのも気に入った。ロングステイ候補としてよい感触をえた。

B オーストラリア

シドニーを中心に東部地区ゴールドコースト、ケアンズ、メルボルン等を訪ねた。西部バースまでもあしをのばした、レストランでの食事の多さと土地の広大さにもおどろいた。

③ 東南アジア

A キャメロ ハイランド (マレーシア)

はじめて1,999年に尋ねたが、熱帯地域に位置しながら海拔1500mの高地のため1年を通して

20℃前後と温暖な気候である、ただし春秋は雨が多い。空港からタクシーで4時間のドライブが難点。生活環境は申し分なく、日本人同好会であるキャメロン会が2000年頃には設立され

多くの日本人が参画した、会長に推薦されキャメロン会発展にも尽力した。ホテル、アパート、病院、ゴルフコース、テニスコートも整備されており、安価な飲食店も多く、対日感情は良く、安全でロングステイ地としては条件がそろっている。



B チエンマイ (タイ国)

夏・冬の気候は温暖で過ごしやすい。各種ホテル、アパートも多く選びやすい。ゴルフコースも沢山あり十分楽しめる。食事美味しくバリエーションに富んでいる。もちろん対日感情もよい。

ロングステイ地として最適である。バンコクで乗り換えが面倒だが、大都市であり大学も設置されており住やすい。ロングステイ地としては条件がそろっている。



C ダラット (ベトナム)

かつてフランスの植民地であり保養地でもあったので、あちこちにフラン色を感じる。高級ホテルはじめ手ごろなホテルも多い。アパートは少ない。食事美味しく、世界2位のコーヒー生産国である。ワインも美味しい。紙幣ドンの単位が大きく慣れるまでは大変だ、食事をして100万ドンという具合だ。大都市である。ホーチミンで乗り換えが必要。



D 高雄 (台湾)



東京より空路3.5時間と近い。大都会であり空港から市内までの距離も近い。ホテル、レストラン等には恵まれている。安価なアパートもでき始めた。冬季ロングステイ地としては候補の1つに数えた。

(2) ロングステイ地の条件

①気候

温和な気候であること。高温、低温は避けるべきである。

②治安

テロ、誘拐、卑賤、暴動の発生の心配がなく、また殺人、強盗、窃盗、が少ない事。

外務省の安全情報には常に気に留め、情勢が変化した場合には、素早い判断が必要になる。

③生活費

日本での費用と比べて極端に高くないこと。

④ 対日感情

友好的であること。現地団体との交流会にも参加できることが望ましい。

⑤ 言語

英語で用足りる地域がかなりあり、現地語ができれば

望ましいがこだわらない、言葉は絶対的な必須事項ではない。

⑥ 生活習慣

徐々に慣れてくる程度であること。

⑦ 食事

口に合うか否か調査の必要がある、自炊の場合食材に入手ができるか調査が必要。

⑧ インフラ

医療、銀行、レストラン、ホテル、貸アパートが整っているか調査。アパートの場合自分で確かめること。

(3) ロングステイでの気配り

①現地住民の生活の邪魔をしない。

反感を買わない様、現地の習慣やルールを尊重する。常に謙虚な気持ちで行動し、わか物顔でふるまわない。

②現地への貢献

例として、現地環境保護団体への参加、スポーツ用具、浴衣の寄付、災害時の寄付等が考えられる。

③郷に入っては郷に従え

生活習慣を容認しそれに従う。

④現地語

挨拶ぐらいは現地語交わしたい。

⑤海外旅行保険に加入。

⑥十分な資金の準備

(4) ロングステイの結果

①気候の良い時期に快適な生活が過ごせた。

暑さ、寒さを気にせずに毎日が快適であった。

②治安に不安を感じたことはなかった。

③生活費は日本より安くついた。

④対日感情は良好で、現地住民との交流会をしばしば持った。

⑤言語で困ることはなかった。

⑥生活習慣で困ることはなかった

⑦食事は大筋満足であった。辛い、匂いのきつい食事は避けた。

⑧インフラは満足した。

(5) 海外ロングステイ都市の推奨

*キャメロン・ハイランド (マレーシア)

*チエンマイ (タイ)

*ダラット (ベトナム)

*高雄 (台湾)



2. チャンディダサの日々⑦ プバンデムの牛市

“Prisoner of the charm of Bali”

会員 黒部 正也

65歳で定年退職した私は、毎年一ヵ月バリ島で絵を学びながら民宿暮らしを続けている。最初の一週間はバリ島東北の海辺のリゾート、チャンディダサ村の民宿で過ごし、3、4週間バリ島中部の芸術村ウブドに滞在する。

チャンディダサの民宿は、海辺の椰子の樹の茂る広い庭に、茅葺の小屋が6棟だけ。お湯は出ないが、鄙びた感じが気に入って、2階建ての一室をアトリエ替わりに借りて、バリ島民宿暮らしへの足慣らしとしている。

「牛市を見に行きませんか？」

と、流暢な日本語でサブッさんから誘われた。彼は馴染みの運転手で38歳。2014年、5月のことである。

早朝5時、車は暗闇のチャンディダサの民宿を出て、北方の山側へ向かう。30分走ってプバンデム村に着いた。牛市は既に始まっていた。広い広場にオレンジ色の淡い明かりが灯り、その淡い光の中に牛と人が蠢いている。眼を凝らしてみると、こちらでは男が茶色の仔牛を3頭手綱で操り、元気そうに左右に動かし、買い手の気を誘っている。あちらでは、牛の悲鳴、売り手と買い手の怒号に似た激しい口調が飛び交っている。その向こうでは、買い手の青年が、売り手の男の掌を一杯に開かせ文字を互いに書き合っている。無言の値の駆け引きと私は見た。

この広場には女性の姿は無い。牛と男ばかりの異様な雰囲気のある広場を、二つの淡い街灯がぼんやり照らし出している。私はカメラを手にして牛を追いシャッターを押した。薄明りを通して仔牛を良く見ると、真ん丸の黒い眼が実に可愛い。売り手の男の手荒い手綱さばきで右往左往しながら、怯え切っていた。

「なぜ、夜明け前の暗闇で売買するのですか？」

「牛は朝が一番元気が良いので、売り手は高く売るために早朝に押しかけるのです」

と、サブッさんの答えは明快だ。

この牛市は週一回。道路を隔てた隣の常設市場は毎日開催という。仔牛の値段は7万円前後で親牛よりも高いという。育てて農耕用に使うという。

「ついでに、仔豚の市も見ませんか？」

とサブッさんは牛市に繋がる広場へ誘った。

彼の後について行くと、突然甲高い獣の悲鳴が夜明けの広場に一齐に響いた。何だ？ とその方向を見ると、広場の地べたに転がった丸い黒い塊や白い塊が、一齐に悲鳴をあげている。

バナナの葉に括られ、背中にバナナの固い茎が、まるで鞘の握り手のようにあてがわれている。

女性がひょいと茎を持ち上げると、仔豚がまるでポストンバッグのようにぶら下がった。

30センチ位の子豚がまるで魚のように並べられ、売り手の女ばかりで、甲高い声で買い手に声をかける。買い手も大半が女性で、真剣に物色している。

「子豚を飼うのですか？」「いいえ、丸焼きにして神様のお供えに使います。」

バリ島では“パビ・グリーン”と言って、お供えのメインで、無くてはならないお供えです。一匹7000円位。お祭りが近いので、値上がりしています」

また一匹が蠢き悲鳴をあげた。すると、広場の50匹あまりの仔豚が一齐に泣き喚く。朝日を浴びた広場は、売り手と買い手の甲高い声に仔豚の悲鳴が加わって、眺めるのが辛くなった。私はサブッさんの背中を強く押した。道路の向こう側にある果物や野菜売り場へ急がせた。

プバンデムの朝市は、観光客は見当たらない。村人の歓声や怒号に似た人声が響いて生活感に溢れていた。

早朝5時半から8時半までの3時間、私は朝市の熱気に圧倒された。



プバンデムの牛市

市場を出ると、目の前にバリ島の聖なる山、アグン山が朝日を受けて輝いている。市場はアグン山の麓だったのだ。富士山に似た雄姿をしっかりと目に焼き付けた。チャンディダサの定宿へ帰り、半屋外のシャワー場で、



ブバンデムの仔豚市

赤い塩ビの大きな桶に汲み置いた水を、手桶に掬って、頭から一気に被った。冷たかったが、纏わり付いていた、あの朝市の仔豚の悲鳴からやっと解放された。

「スラマト・パギー！（お早うございます）」

と、テラスからメイドさんの明るい挨拶が聞こえた。テラスの大きな木製の丸いテーブルに、トースト、バターとジャム、目玉焼き、紅茶、フルーツが並んだ。

私は遅い朝食を摂った。テラスの前には広い庭に椰子の木陰が揺れている。朝食を終えて、テラスの寝椅子に転がった。眼を瞑ると、堤防に碎ける波音だけが聞こえる。「カラン、コロン」と、カウベルの乾いた音がした。音のする方を見ると、大きな椰子の樹の根元で、長い紐に繋がれた赤茶色の仔牛が芝の若草を食べている。管理人のナディさんが広い庭の草刈り機代りに仔牛を買った、と言っていたな、と思い出した。



朝日に輝くアグン山

「カラン、コロン」と、仔牛の動きに合わせてまた鳴った。私は快い眠気に誘われた。

3. チャンディダサの日々⑧ レンボンガン島の天草刈り

“Prisoner of the charm of Bali”

会員 黒部 正也

民宿の部屋を出ると外はまだ真っ暗。ヘッドランプの灯りを頼りに海辺に向かう。小さな入り江に、チャーターした小船が待っていた。ガイドのサブッさんと助手役のニョマンさんと合流した。サブッさんの奥さんが見送ってくれた。

腕に刺青をした漁師の青年が、ヤマハのポートエンジンを巧みに操って入り江に押し寄せる波を乗り切り海峡に出た。

この海峡は、海底が深くうねりが大きい。潮の流れが早過ぎる時は出航を見合わせることもあるという。

「朝日が出ますよ！」

と、両手で舵を握った刺青青年は、顎で日の出の方向を示した。テペコン島の辺りの水平線が赤く染まり、小船の両側に設えた竹竿フロートが真っ白い飛沫で波を描いた。ボートは鏡のように屈いた海面を滑るように進んでいる。2013年5月、バリ島民宿暮らし4日目のことである。

私は2000年から毎年1カ月ウブドで絵画を学んでいるが、最初の1週間は、鄙びたリゾート、チャンディダサで頭をバリ島バージョンへ切り替えている。

この地の馴染みの運転手サブッさんは、私の心境を見透かしたように巧みに小旅行に誘う。今回もその誘いに乗ってしまった。

今年のプランは、民宿の浜辺からチャーターした小船で出発して、バリ島の向かいの島、ペニダ島とレンボンガン島を1泊2日で巡る旅だ。

午前のペニダ島の海辺と山頂のお寺詣でに疲れた私は、「午後は隣のレンボンガン島へ移動しませんか？」と、ガイドブックを眺めながらサブッさんに言った。彼は思ったよりもあっさり私の提案に賛成し、トヤバケの真っ白い砂浜で、モーターボートをチャーターしてくれた。小型のモーターボートは、小波を切る度に青空に真っ白い波飛沫を散らして大きく揺れた。心地よい震動だ。

砂浜に近づいたボートは、急に減速した。舳先に突っ立った助手役のニョマンは、浅瀬の海中に突き立てた竹竿の間の狭い海路を注意深く誘導した。ボートを運転するサングラスの青年と呼吸を合わせ、船体を浜辺



に着けた。

レンボンガン島に上陸したサブッさんは、あっという間にロンボク島のルンブン(米倉)を模した鄙びた 2 階建てのコテージを見つけた。彼はざあーと部屋をチェックすると、オーナーと値段の交渉を始めた。

彼の交渉力にはいつも感心する。何をどう交渉したかわからないが、ぼそぼそ話し合っているうちに、相手は頷き、値引きを了解する。

「2 階建ての 2 部屋付きで 40 万ルピア (約 4 千円) にさせました!」と、彼はにやりと笑った。私は 2 階、二人は 1 階と決めた。私は早速シャワーを浴びてベッドに転がった。早朝の出発だったので、ぐっすり眠ってしまった。

突然の歓声に私は起こされた。裏手の小窓を開けると、夕日の輝く波打ち際に大勢の村人が蠢いている。

「何事が始まったのか?」と、私はカメラを手にすると、浜辺へすっ飛んだ。

海辺は干潮で、竹竿が立ち並び、天草の養殖場が剥き出しになった。四角に何条にも張り巡らされたロープに黒い天草が纏わり茂っていた。言わば天草の田圃である。その中へ村人が腰の辺りまで浸かって、天草を刈取り手元まで引き寄せた 3 メートル位の小船へ、競い合って放り込んでいた。海に浸かった村人は、ざっと数えて 50 人。歓声はここから出ていた。

刈り取った天草は、砂浜で待っていた村人へリレーされ、大きな竹籠へと入れられる。男は天秤棒の両端に二つの大きな籠をぶら下げて、軽々と天草の干場へと運んだ。女は頭上に天草の入った大きな籠を乗せると、パッパッと少し傾斜した砂浜を苦も無く運ぶ。大勢の子供たちも、親の仕草を真似てキャッキッと叫びながら天草を干場へ持ち上げた。海辺はまるで、お祭りのような騒ぎになった。海中の天草の刈取り、砂浜の運搬風景を、私はカメラを持ち夢中になって追いかけた。

砂浜に続く天草干場には青いビニールシートが 100 枚くらい敷かれ、天草はその上に色ごとに分類されて干されている。緑、黄、茶、ピンクなど多彩な彩りに私は見入った。

「4 日間で乾燥が終わります。緑色が一番高く売れます」天草は、その粘性を利用してアイスクリームなどの食品、薬品、美容などに用いられる。日本や米国へ輸出される、と天草干しの作業員が説明した。

その脇で、妙な作業が眼に入った。若い女性が二人、ケラケラ談笑しながら黒いロープに 10 疋ごとに短い白いビニール紐を操り天草の芽を結わえている。

「このロープを海へ漬けておくと、2 カ月でまた天草

の刈取りですよ!」

と、二人は私に真っ白い歯で笑った。レンボンガンの天草娘さんはめっぽう明るかった。

夕食は浜辺の食堂で摂ることにした。サブッさんは馴染みの店があるらしく、海辺に沿って作られた遊歩道を北へ向かってトットと歩いて行く。暗い浜辺にそこだけが急に明るい照明があるレストランがあった。真夏の琵琶湖湖岸の海水浴場を思い出した。

「この席にしましょう」

と、遊歩道に面した座敷風の席を選んだ。二人は珍しくビンタン(ビール)を所望した。酔ったサブッさんとニョマンさんは饒舌になった。バリ語なので会話の中身はわからないが、めっぽう明るい表情から解放感を満喫しているようだ。

私は香辛料サンバルが程よく効いたサテ(串焼き)を口に運んだ。天草の香りがほのかに漂う座敷で、レンボンガン島の夕食を楽しんだ。



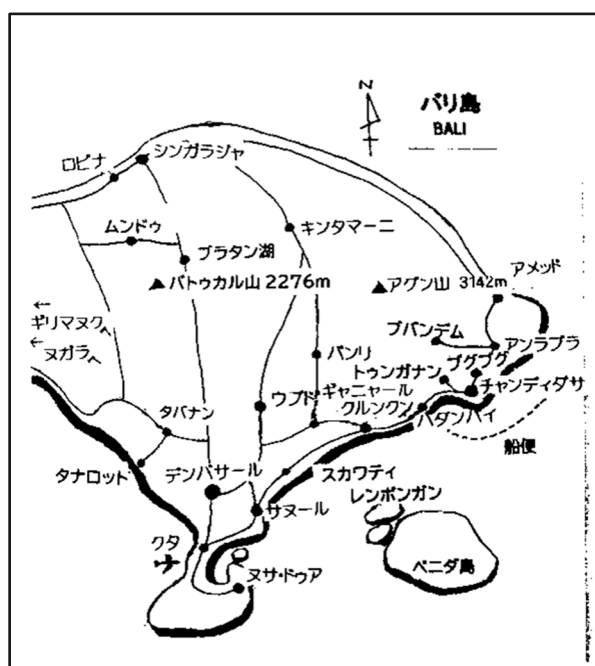
ルンブン(米倉)風コテージ



天草の陸揚げ



天草の干場



4. 走行距離 60km に

会員 鳥居 雄司

昔の記憶だと

北海道で 8 月開催の大会に出場するのは今回が最後になります。エンデュランス競技は走行距離、走行時間もながく、馬に大きな負担がかかります。北海道の夏は気温が多少あがっても、湿度の低さからエアコンは不要と言われていました。私が社会人になりたての頃、ほぼ 50 年前ですが、お盆に阿寒湖のほとりでお盆踊りをしたことがありました。浴衣で曲にあわせてグルグル回りながら踊ります。真夏と言っても寒さを感じ、準備された焚火に集まって暖を取った記憶が鮮明に残っています。ところが、最近の北海道はかつて不要と言われていたエアコンだらけです。馬に大きな負担になるエンデュランスなので、いつも馬をお借りしている馬主さんはこの大会（2020 年）以降、8 月は大会参加を止めるそうです。



走行距離 60km に参加

気温 20 度、小雨の大会になりました。前日の下見では空は青く澄み渡り、強い日光に飼料用のトウモロコシが実っていました。大会参加者に水分補給、試合運びなど十分な準備を求められます。走行中は風をうけるので、涼しそうな印象がありますが実際は考える以上に汗をかいています。

日頃の 45 分間の乗馬練習で常歩（なみあし）、速歩（はやあし）とわずかな駆歩（かけあし）をするだけで汗をかきます。真冬 2 月の練習でも快適な上半身の服



装は、汗を吸収しない蒸発しやすい登山用の化学繊維でできた多少厚手のシャツ、落馬の衝撃を緩和するベスト型のエアバッグ、以上です。気温は10～14度が乗馬をしていて最も快適です。気温20度は人も馬も水分補給に要注意です。今回は小雨なので日差しによる気温上昇を考えず、雨で人も馬も体温上昇を防げそうです。

申し込んだ60kmの参加者は

7名が60kmに参加しました。私と同じ馬主さんから3名、全日本大会で優勝して、秋の全日本大会に出場予定の選手を含む3名、この大会で会場を提供している牧場から1名の内訳でした。私たち3名は制限時間内に到着し、獣医検査を無事通過する完走を目指しています。それで、会場を提供している牧場からの参加者について走り始め、馬の動きを整えながら進むことにしました。

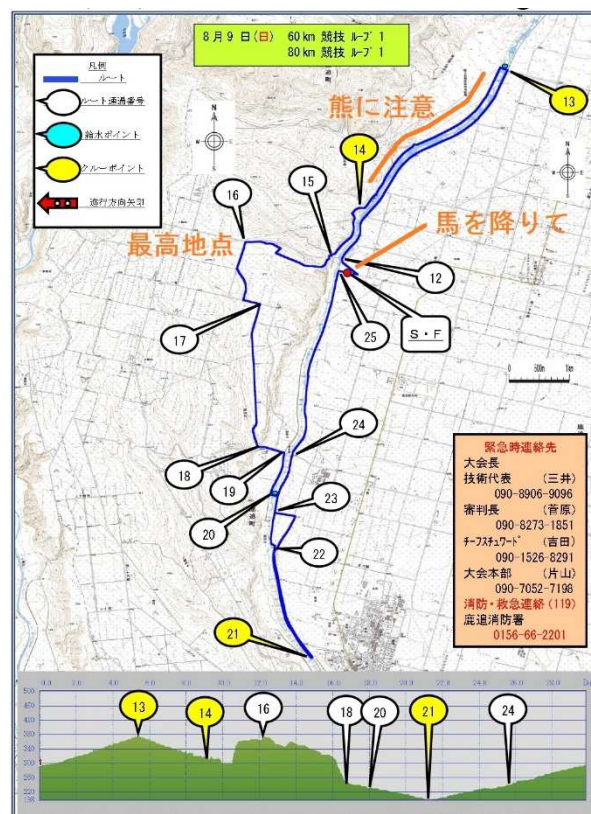
1区間のコースは川沿いをのぼり、対岸に渡って川沿いをくだります。途中できつい登りを区間最高地点まで行き、急な下りを川岸まで戻り、川沿いを進んで折り返しから出発点に戻ります。高低差はありますが川沿い、川渡り、木立の急な登り、高原の開けた景色の走破、砂利道の下りなど変化に富んだコースです。

会場を出られない

6時30分に出発して牧場出口へ向かいます。出口付近は馬の放牧、ニワトリ小屋、つながれたヤギ、ウサギ小屋など多くの動物が飼われています。この牧場から参加した馬には見慣れた景色ですが、私達の馬にとっては異様な景色に見えるようで、動かずに止まってしまいました。後ろについて走ろうと考えていた選手に取り残され、馬を整える当初の計画は崩れるし、余分な時間経過は後の走行に響いて完走の妨げになるし、不安になります。日頃の乗馬練習では拍車で蹴ったり、鞭でたたいたりしますが、エンデュランスは拍車、鞭の所持は禁止です。拍車のないブーツで蹴ったり、手で馬の尻をたたいたり、脚で馬の腹を圧迫しますが馬は動こうとしません。馬は見慣れないものは危険なものと考えらるしく、危険と判断するとひたすら逃げて距離を置こうとします。いつものクラブで練習をしているときに、風で流されてきたレジ袋を見るなり、一瞬で180度反転して逃げの態勢になるのを見ました。あまりに見事な半回転で乗り手は落馬することなく馬と一緒に回転してポカンとしていました。回転ではなく横跳びで逃げようすると、馬の動きから取り残され

て落馬することが多いです。

5分ほど無駄な努力をしましたが、実ることはなく最後の手段で三人の中で最も若い高校生が馬を降りて手綱を引いて馬を動かし、残る二人がそのあとをついて牧場を出ました。



熊注意の場所で

先に行く馬に追いつこうと13番の折り返しから川の対岸を14番に向けて走ります。主催者のコース説明で、熊の出没を告げられました。注意をするといっても、騎乗している選手より走っている馬の方が視野は広く、嗅覚も鋭いので、人より先に熊の気配を感じます。少しでも感じると身を守る本能から馬は安全と思われる方へ一目散に走り、そうすると制御不能になり、落馬しないことを最優先にします。落馬して熊に襲われたくありません。それで、熊注意の場所では、遠くから人の通過を知らせて、熊が近寄らないように仕向けるために、笛を吹きながら通過します。笛を口にくわえて断続的にならすのは結構な肺活量を求められます。緊張感も手伝って走行速度が増して、16番の最高地点で先行した選手に追いつくことができました。

坂の上りと下りを比べると、下りの方が馬に負担がかかります。それで下りは速度をやや落とします。砂利道、ぬかるみなど足場が悪いときは前脚でしっかり路



面をつかめずに滑ったりバランスを崩したりすることが多くなります。乗り手が下馬して馬を引くのは下り坂が多くなります。先行者は速度を落とさず下るので私たちは安全を考えてゆっくり無理なく降りることにしました。

ゴール近くで

1 区間の後半になると疲れがでてきて集中力が欠けてきます。このとき、牧場の出口で下馬して馬を引いた高校生が「1 区間ゴールまで残り5km」と声をあげました。コースの途中で目安になる距離の表示はありませんが、彼は腕時計型の走行距離計の数字を伝えてくれました。走行距離計は衛星から自分の位置（緯度、経度）を頻繁に受けとり、時計の位置変化から走行距離を表示します。スマートフォンのGPS活用の登山用アプリも同じように使えます。

残り5kmの声で疲労が減少した感じがして3頭ともに無事に到着することができました。この区間は距離30kmを3時間で走破する予定でした。出発直後のもたつき、急な下り坂をゆっくり下る等ありましたが、2時間29分で走破し、3人とも獣医検査に合格して2区間へ進むことができました。

ベスコン？

エンデュランスは走行時間を競う個人競技です。時に互いに助け合う必要に迫られることもあります。他の参加者のためにかかった時間を自分の走行時間から省くことはありません。出発から到着まで、馬の状態を良好に保ちながら走り切ります。参加者の順位は、完走した走行時間の少なさで決まります。その他に成績上位者の中から騎乗馬の獣医検査結果が最良だった参加者に「Best condition（ベスコン）賞」が贈られます。この賞の受賞者が最も称賛されることがエンデュランス競技の魅力の一つです。

私の記録

とりあえず20歳代前半まで パート1

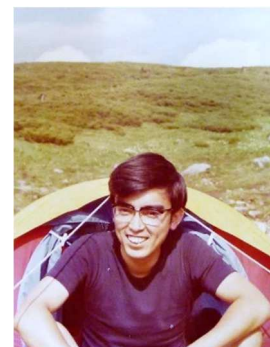
会員 石尾 賢一

はじめに

先に、「りらいぶジャーナル」別冊として伊丹淳一様『足あとを振り返って』、渡嶋ハ洲夫様『孫への贈り物（160年の歴史）』という自分史の編集出版をお手伝いさせていただきました。

それが機縁で、竹川忠徳理事長、阿賀敏雄関西支部長からな

にか記事を書いてほしいとの強い要請を受けていました。しかしながらわたしは先のお二人のような赫々たる人生物語がある訳ではありません。これまでどちらかといえば社会的責任を回避し、あまり出世も望まず、会社にすべてをささげることのない人生を希求してきた者でした。



しかしながら74歳の今日に至るまで人並の生を受けてきたのは、ご縁の諸氏より多くの助成を受けてきた賜物であります。そのご縁を思い出して書き記すことで恩顧に報いることにさせていただくことにしました。小学校低学年で父がカメラをおもちゃに買ってくれ、写真を撮ることが趣味として現在まで続いています。その写真を頼りに記憶を思いおこし、20歳代前半までを一区切りとして著名な時事など共に記録として書き出してみました。

つきましては読者にとっては何の益もない「りらいぶジャーナル」の余白を埋める駄文でしかありません。どうかこの先はなにとぞ気楽に読み飛ばしていただければ幸いです。中学まで子供の頃は身体が弱く給食のミルクが飲めずに昼食は家に帰って食事をしていました。体育と音楽が苦手で、跳び箱は飛べず、走っても女生徒に負けていた。歌は聞く人が不快になるので人前で歌ったことがない。小学校二年生の折、体育と音楽は五段評価の「2」をいただいていた。一方絵を書いたり、工作をするのが好きで模型のゴム飛行機を作ったり、戦艦大和を筆頭に連合艦隊を作って遊んでいた。

このように運動系には全くよいところなかったが、父親が映画、演劇が好きで近くの「弥生座」という三本立ての洋画専門の映画館には新作の上映のたびに連れ立って一緒に観た。洋画で記憶に残っているのは1953年劇場公開された「雨に唄えば」、1954年シネラマ専用劇場に改装されたOS劇場で



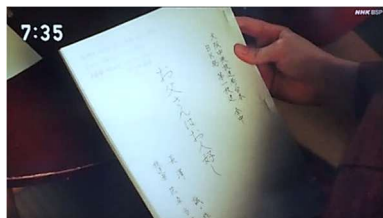
観た「これがシネラマだ」、1955年公開「青い大陸」、1956年に公開された「赤い風船」など幼稚園から小学校低学年ではこれらの美しい映像に心を奪われた。テレビが家庭に入る前夜、これらの詩情溢れる映画をカラー(当時は総天然色)の大画面で鑑賞できたのは幸いであった。

◇おとうさんはお人よし

世がまだラジオの時代に家族で耳を傾けたのは花菱あちゃこ、浪速千恵子の「お父さんはおひとよし」(1954年-1965年、月曜日 20:00 - 20:30)であった。ほんとうの夫婦のような二人のこてこての大阪弁、もっと言うと島之内弁の掛け合いが毎月曜日のお楽しみであった。その浪速千恵子の一代記を60年経った今の世にNHKが連続テレビ番組「おちやん」として放映している。

「おちやん」のなかで花菱当郎が、すでに廃業していた千代に「戦争で傷んだ心を癒して戦争以前の家族の生活を取りもどしたい。その相手役には千代さんしかいない。」「笑い」が日常の幸せを復活させ戦争で負った心のキズを癒やすことだところろを込めて口説き、千代の心をほどこいていった。

このシーン、後で述べますがわたしの家庭も含め戦争を経験したたくさんの日本人が「生活の笑い癒し」を必要としていたことがわかるシーンでした。



◇教育パパ

「お父さんはおひとよし」がはじまった昭和29(1954)年は小学校入学の年である。家のラジオが戦前からの並四式から五球スーパーに変わったのがこの頃で、プラスチックで成形された筐体と周波数をチューニングするマジックアイがとても新鮮に感じた製品でした。

NHKがテレビの本放送を開始したのは1953(昭和28)年2月1日。テレビではじめてプロレスを楽しんだのは力道山・木村組対シャープ兄弟の試合1954(昭和29)年2月でした。この中継は十三幼稚園を卒園する年で父親と有山園長先生のお宅で見せてもらった。

父はいわゆる教育パパで、いつも会社の帰りに本を買ってきてくれた。自分で演劇のシナリオなども書いていて小学校の学芸会では父親の脚本で芝居をしたこともあった。そのおかげで小学校高学年には本箱に一ぱい本が詰まっていた。ジュール・ヴェルヌの「15少年漂流記」、「エジソン偉人伝」な

どの人文系から自然科学系の図鑑など幅広いジャンルがそろっていた。東西冷戦で核実験が続けられるなか核分裂によるウラン原子番号の遷移などもそらんじていた。それで勉強はほどほどにできたので学級委員長にも選ばれてもいた。

十三から大人10円子供5円で行くことができる阪急百貨店は屋上遊園地で遊び、阪急吹奏楽団の演奏やサテライトスタジオでラジオ実況放送を聴き、大食堂でカレーを食べて帰るというのがお楽しみのコースでした。宝塚遊園地にもよく連れてくれた。一見よき父のようであるが、癲癇持ちでかつ喘息持ちであったので顰め面と苦しそうな呼吸音と勉強しろという絶え間ないはげましが心の深層にきざまれて残っている。



◇はじめてのカメラ

親父はカメラ好きでもあり小学校の低学年でフジペットというフィルムカメラを買ってくれた。

富士フィルム社が写真の入門機ともいえる小型カメラ「フジペット」を開発して発売したのが1957年(昭和32年)9月というからちょうど小学校4年生であった。「フジペット」の標準小売価格は1,950円。写真の入門機として小学校高学年を中心とする年少者層や初めてカメラを手にした女性などに爆発的な人気を呼んだという。当時はブローニー版という



12枚撮りのフィルムをカメラに挿入して写真を撮っていた。はじめてカラー写真を撮ったのが中学2年の夏休み、先生二人に私と同級の友人4名で園部の「るり溪」に一泊のキャンプに

連れていってもらった折だったと思う。その頃のカラー写真は一枚ごとに硬い紙で額装されていた。

◇はじめての山登り

わたしがはじめて山に登ったのは京都宇多野の「衣笠山」が最初だったかもしれない。十三小学校の2年から4年まで担任していただいた松下千恵子先生のご主人が同志社大学文学部の先生でした。それで住まいのある衣笠から毎日大阪の十三小学校まで通っておられ、その松下先生のお宅を訪ねたお



りに裏山の衣笠山に登った。

松下先生のクラスで同級であった徳永倭君のお兄さんが阪大医学部の先生で牧有恒マナスル登山隊に医師として同行されていた。1956年5月三度目にしてマナスル登頂を果たした後、徳永家の庭にスクリーンを建て、マナスル登山記録の野外映画会を催された。その時の神々しいマナスルの山嶺を目にしたのが山岳に畏敬の念をもったきっかけであった。

虚弱体質から脱して人並になったのは小学校5年生の折、淀川河川敷を体育の授業で走った時でした。コースは新淀川の堤を十三大橋のたもとから東に向けて出発し、国鉄東海道線をくぐり長柄橋で折り返す往復約5Kmのマラソンである。このときクラスで男女50名位が走り12位で帰ってきた。それで筋力が弱くても持久力ではそれなりにヒトに伍していけることがわかってきた。

◇大阪市立十三中学校

大阪市立十三中学校は淀川以北阪急宝塚線より東側、JR東海道線までを校区としていた。わたしが三学年となった昭和37年度は昭和22年度生まれを筆頭に各学年が20クラス編成となり、しかも一クラス50名を越えていて合計3千名を越えるマンモス校であった。教室は運動用具を入れた小屋を教室に改造し、校庭にプレハブ教室をつくりさらには新大阪駅に近い西中島に分校を作って急場をしのいでいた。教室は後ろの壁まで机と椅子で詰まっていた。ただ上には上があって隣の新北野中学では最大24クラス編成だったという。ちなみに本年（令和2年・第76期生）の新1年生170名というから、当時の想像を超えた超過密状態には現在の先生も生徒もその親たちも理解できないと思う。

◇理科クラブ

中学入学時、早々に五ツ木の学力テストがあって1,000人中12番で後にも先にもこの時が最高の成績であった。十三中学では理科クラブに入って理科実験室が放課後の活動拠点となった。理科クラブは鷹見先生という女性の先生が指導されていた。理科実験室の試薬倉庫には様々な薬品が並べられていて、当時は施錠もなく自由に使って化学の実験をしていた。

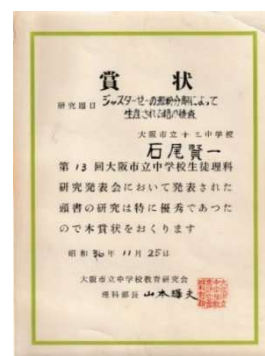
この頃、木造校舎の天井は天井板がはずれて穴が開いており、天井から埃が落ちてくる中で勉強し、弁当を食べるという状態であった。そこで理科クラブ活動としてサツマイモを蒸かして培地とし職員室で空気に晒してみた。それを理科室に持ち帰って保温器で培養してみると見事に雑菌が繁殖した。その成果を鷹見先生が職員会議で披露して早急な教室の改修を提言された。ところが1961年（昭和36年）9月16日に室戸岬に上陸した台風（第二室戸台風）が大阪を直

撃したことにより、木造校舎の屋根が吹き飛ばされてそれどころではなくなった。理科部では地区の研究発表大会があって、わたしはジアスターゼによる各種糖の生成を分析して発表した。

中学二年生時の担任は磯部先生という国語の先生で美しい漢字の板書がいまでも印象深く思い出す。磯部先生が読んでみなさいと貸してくださったのがジャックロンドンの「白い牙」でした。それまで理系の本が多かったが、磯部先生が文学作品に興味を向けるきっかけを与えてくださった。

◇大阪府立豊中高校

十三中学三年時の担任が井畑先生という女性の理科の先生で阪急豊中駅から豊中高校への通学道路のなかほどにある稲荷神社の脇に住んでおられた。それで志望高校を決める折に井畑先生に呼ばれて「豊中高校」を受けてみないかと告げられた。当時団塊の世代の大量生徒をさばくため、大阪府の教育委員会は1963年より府立高校をそれまでの小学区を廃止し大阪市北部、豊中、吹田、箕面、池田、茨木、高槻各市と豊能



郡、三島群を一つの学区（第一学区）としてくり生徒の配置の適正化を考えていた。たぶん中学の先生方は学区制の変更にあわせて各府立高校へ生徒を按分することに意を払うことになっていたのであろう。自宅からは北野高校が近くて便利なのであるけれども、阪急宝塚線での電車通学になんとか慣れて豊中高校を受験することになった。結局大阪市立十三中学からは、小学校で同級であった田中房子、藤井孝子さん、中学で同級の小西幹夫君など十数名が十三中学から豊中高校へ通うこととなりました。

豊中高校に入学したもののまことに地味で目立たない性格で、かつ元来それほど頑丈でなかった消化器に異常を起こし、楽しいはずの高校生活がそれほどでもなかったのは誠に残念なことでした。クラブ活動にも属さず交友範囲は狭いものでした。小さい時からひとりでコツコツと精をだすものづくりが好きであったので、芸術系の選択科目に「工芸」を選び、吉原作次郎先生の指導のもと木工工芸を学びました。



工芸科目では唐草模様の彫刻で額装した鏡、本箱、バスレフ型のスピーカーボックス、などを制作した。スピーカーボックスを鳴らすために真空管アンプも自作した。

文化祭では桜塚高校と合同のフォークダンスが催されていました。広い校庭を目一杯使ってのダンスの輪はなかなか壮観でした。校舎の三階に駆け上って撮ったのがこの一枚。

この頃、近くの山はよく歩いていて同級の植村敏明君とは

筆デッサンの試験があっしんどい受験勉強をさらに負荷をかけることになった。京都工織大学意匠工芸科は競争率 20 倍の超難関であって、才能があるとは言えない私のデッサン力では合格するはずがない。一応国公立を目指していたので国語や地理・歴史など、私学の理工学をめざすなら割り切って捨ててもいい科目に手間をかけて勉強した。このころ代々の天皇を神武・綏靖・安寧・懿徳・孝昌・康安・孝霊と天皇系譜



六甲山や蓬萊山などを暗くなるまで歩いていました。男女を問わず人付き合いの良く、色気多く博識の植村君はいつも深く妖しい人生哲学を教えてくれるのですが、これまた学校の教科と同じく身につくことはありませんでした。今でもおつきあいをしているのは飯田誠、上田治夫、植村敏明と学籍簿の並びが隣り合っていた諸士であります。

修学旅行は四泊五日の南九州旅行。四泊のうち行きかえりの二泊は夜行列車。向かい合わせの座席に板を渡して足を延ばして仮眠するという団塊の世代ならではの過密感にあふれた旅行でした。その列車内でのスナップが残っていました。わたしと楽しそうに話をしているのがシャンソン歌手のヤスコ・ウィルド(杉山泰子)さん。修学旅行は昭和 40(1965)年でした。



右は半世紀以上を経たあるあるです。

◇受験勉強

当時、国公立は一期、二期と別れており、二期には「京都工芸繊維大学意匠工芸科」を選んだ。そのため主要教科の他に鉛

をほぼ奈良時代の聖武あたりまで語っていた。でもそういうことに寄り道をするのが楽しくもありまことに困った性格であった。案の定京都工芸繊維大学の合格発表ではわたしを真ん中に前方 20 名後方 20 名に合格者がおらず、受験した教室のほぼ全員が不合格というような超難関な結果であった。京都の大学へ進学を望んでいたのに、運よく同志社大学工学部に合格し浪人することなく大学に進学することができたのが何よりの幸いであった。何校か受験してわかったのは豊中高校の「英語」力。入試のなかで同志社の英語は難しかったが、豊中高校の学習レベルが高いのが幸いした。



十三中学校から一緒に豊中高校に入り東大に進んだ小西幹夫君は「君は勉強の方法が間違っている。」と正しい指摘してくれたが、まさにその通り「寄り道」「脇道」が好きな性格はその後も今に至るまで治ることがありませんでした。同志社大学



大学入学時のオリエンテーションにてクラブを選ぶにあたり、楽しく山を歩けそうな「ハイキングクラブ」に入部を打診すると、すでに定員オーバーで募集を締め切ったと断られた。そこでやや趣向が近い「サイクリングクラブ」を選んだ。「ハイキングクラブ」には女性も多かったが、この「サイクリングクラブ」は男性ばかり。この男くさいサイクリングクラブには高校同級生の上田治夫君も一緒に入会した。サイクリングとなるとサイクリング車が必要で親にたのんで買ってもらった。そのころ大学卒の初任給が3万円代でサイクリング車は15万円くらいであった。安くはない大学入学に授業料。そのうえに高価な自転車。よく親が息子の贅沢に耐えてくれたと感謝しかありません。

サイクリングというと都大路を軽快に走りまわるものと思っていたがさにあらず。先輩には大阪から京都まで自転車で通学するヒト、東京から京都まで寝ずに走りきるヒト、自転車をかついで富士山に登るヒトなどさまざまな猛者がおられた。週二度、大学南側に隣接した御所に出向き、御苑の芝生をお借りしてのトレーニングで身体を鍛え、休みの日は北山に向かって走り、登山者が歩く峠道を自転車をかついで越える。という心地の良い男たちの集団であった。そして時間があれば新潮社や岩波の文庫本を読み漁っていました。たぶん並みの国文系学生より沢山読んでいたと思います。



◇大学紛争とゼミナール

大学卒業を控えた昭和44（1969）年は世の中が騒然とした年であった。1969年1月18日から19日にかけて、機動隊が、東大安田講堂の封鎖解除と共闘派学生の大量検挙を行った（東大安田講堂事件）。その結果東大への入試そのものが中止となった。

同志社大学も今出川校地の教室や研究室がロックアウトされ、四年次は授業がほとんどできなかった。ただ工学部の研究室がある博遠館はロックアウトの勢力が及ばずゼミナールが成

立してかろうじて卒業研究を行うことができた。私が選んだ「光・電子回路システム研究室」は1965年に京都大学から小川徹教授を迎えて工学部電子工学科が発足と同時にスタートしたもので、電離層の現象研究、ヘリウムネオンレーザー発振の現象を研究材料としていた。ところが京都大学では昭和42（1967）年に電離層研究の第2部門として超高層電波工学部門が設置されることとなり、当研究室の小川徹先生が京都大学にもどられることとなった。突然研究室に教授がいなくなった同志社大学では急遽同志社生え抜きの太田建久助手が抜擢されて、講師としてゼミナールを担当することとなった。若くて世話好きな大田先生は学生の面倒見がよく、以後退任されるまでゼミナールの同窓生を年度ごとにまとめあげ三年に一度ゼミナール全体同窓会を開催しその運営が50年を経て現在までも続いている。研究室の初代教授であった小川徹先生とも交流をつづけ、小川先生はお亡くなりになるまでゼミナールの全体同窓会にこころよく出席してくださった。

工学部では学科ごとに卒業記念アルバムを制作することになっていて、わたしがアルバム「編輯長」を買って出た。この年は大学の行事が行われる「栄光館」での卒業式ができなかったが、「記念アルバム」は無事出版することができた。



大田研究室のおつきあいは現在も続いている生活の核になっている。



<次号へ続く>



「一大決心、全飼育頭数の約半数病死」

会員 赤神 潔

元船員のトーライフはアイヴィンの奥さんキャレンの従兄弟で、アイヴィンの所から、角を東に回って4つ目の10エーカーの農場オーナーだった。使用人を雇わず1人で基礎ミンク1000頭程を飼っていた。奥さんのジョージンは典型的なカナディアン、5人の子供の世話で、剥皮時期と種付け時期以外トーライフが困っていても、余りミンクの仕事は手伝えなかったようだった。

トーライフは1年中毎日休みなしで、少しも気を抜かず、少しノイローゼ気味になっていた。ミンクの数が減ればその分、夏の忙しい時にゆっくり出来ると考えたようだった。夏にはステーツ(アメリカ側)のバーチ・ベイ(海浜避暑地)にある、海辺の彼らのキャビンへ、奥さんや子供たちと一緒に来たかったのだろう。ミンク場の規模はアイヴィンより小さく、よくアイヴィンを訪ねて来ていたが、私がミンク場を探しているのを聞き付けて、「ジミーに子ミンクを売っても良い」と言い出した。私は今まで子ミンクを種ミンクとして買うことなど聞いたことがなかったが、キャレンが、「彼のミンクはトップ・クラスではないが、悪くない」と言ったので、メス1200頭、オス300頭、離乳して餌を食べ始め、ディステンパーと腸炎のワクチンの済んだパステル種の子ミンクを買うことにした。子ミンクだから良い毛皮か、良い色か、全く分からなかった。ただ、トーライフとキャレンの人柄と言葉を信じる他なかった。

当時、実は毛皮の市場は余り良くなかったが、どちらかと言えばパステル種は濃い色が比較的流行っていて、比較的良好な値段だった。このとき、彼は、私に自分の持っている色の薄いパステル・ミンクを全部ごっそり、私に売り付けて「これが、私の最も(資質の)良いミンクだ」と言った。実際には、これが後ほど、私たちに幸運をもたらすことになった。こんなに極端に薄い色の質の良いパステルは、当時、世界中どこを探しても、もう残っていなかったのだ。毛皮市場の値段は悪かったが、余り良い資質のミンクなので、トーライフが迷って殺せなかったのだ。6年後の我々のシアトルでの快挙の後、トーライフ自身、慌てて少しは残っていないか、あちこち自分の飼育場の中を探すが不成功に終わった。

晴天の続く初夏のある時、隣町にあるコープ店(日常雑貨、

園芸用品店)へ水道のホースを買いに行ったことが在る。白人の店員に色々質問して、50フィートの業務用だという薄緑の、見たところゴム製と思えるホースを2巻き買った。飼育場に戻って、早速、暑がっているミンク達に散水しようとするが、一向にホースから水が出ない。4季を通じてミンクには、水は絶対欠かせない。スタンのミンク場の1部の小屋の籠には水呑ニップル1個だけで、水飲みカップが付いていない。籠の中にはまだ親子8匹や9匹も入っているものがある。特に、その年に生まれた成長の良い雄の子ミンクは、その年初の摂氏30度以上の高温の際、水浴びして体温を調整し、うまく暑さをしのぐ方法を親から習わなければ熱中症で死んでしまう。特に、春から秋までの成長期には、ストレスは出来るだけ避けねばならぬ。

ひょっとして、井戸のポンプが知らないうちに潰れているか、停電かも知れない。色々断水の可能性を考えながら、スタンの飼料調理場まで慌てて走った。飼料調理場は停電ではないし、調理場の蛇口には水がでていた。走って最初の小屋に戻ると、ミンクの水飲み用のニップルには水がでていたし、水圧も充分あった。ホースを繋いだ蛇口まで戻って、蛇口から水の出ることを確認し、やっと落ち着きを取り戻した。ホースを調べても別段折れてはいないのに、水は1滴も出なかったのである。全く、考えられないことが起ったのである。今買ってきた新品のホースが不良品で、『途中でつままっているのでは』と疑わなくてはならないような技術(品質管理)力の国から来ていないので、気が付くまでに時間が経ちかっても当たり前だ。ホースの中程に固い箇所が在る。どうも、ホースの中に穴が開いていないようだった。子ミンクの状態を気遣いながら、ガソリンを使って、わざわざコープ店まで戻り、そのホースを良いものに替えて貰いに行った。

その時、白人の店員は頭から、私がてっきり何かをホースに詰めたかと思い出した。私はその態度に腹を立て、わざわざホースの固い箇所を手探りで探して示し、新しいホースが間違いなく使えるかどうか、水を通してテストをするようにと無理に要求して、確認してから、買ったのを覚えている。店員は何時ものことのように、無表情で面倒くさそうで、別に驚かなかった。その店員の態度を見て、将来が少し不安になった。

1975年12月の秋が来て、トーライフから買ったミンクが立派に成長した。血液検査をして、アリュージョン病のミンクを探して淘汰することにした。私が革のミトンをして、右手で暴れるミンクの体を捕まえ、私の腹の前あたりでミンクの頭を抱えるように固定し、左手でミンクの片側の後ろ足を握り、動かないようにして、富美子に差し出すと、富美子



がそのミンクの後足の爪の1部を手で持ち、爪切りで深爪気味に切る。そして滲み出た血液の小さなしずくを直径1ミリ、長さ約5センチ程のガラスの毛細管で採取する。ガラスの毛細管の半分位血液が毛細管現象で取れると、一旦採取した血液がこぼれ出ないように、ガラスの毛細管の端を薄い粘土で出来たプレートに突きさす。血液を採取した毛細管が24本貯まると、アイヴィンが貸して呉れた遠心分離機にかけ、血液を赤い血球部分と透明な血漿部分に分ける。そして、毛細管を手で折って、透明な血漿部分の1滴だけをガラス板に取り出し、ヨード試液を加え、反応を見る。抗体があると、反応して黒く濁る。

ミンクはアリュウシャン病に対して血液内に抗体を持つことが出来るが、出来た抗体の形状が大き過ぎて、血液をろ過する働きをする脾臓の組織を通り抜けることが出来ない。そのために脾臓が目詰まりして、どんどん腫れ上がる、抗体の動きもはたせられず、ミンクは死に至る。よって、伝染性で、治療の手だてのまだない現在、抗体のある個体は淘汰することに成っている。簡単ようだが、この血液検査は、大体、調べるミンクの数の少ない、剥皮後の秋から冬にすることが多く、病気のミンクはまだ冬毛皮として、まあまあの値段で春にあるオークションへ出荷することが出来る。しかし、この年、種ミンクとして出来るだけ多く残すため、全てのミンクを剥皮時期前に検査をすることにした。

薄暗い氷点下の小屋の中で、小さな木箱（蓋を取った巣箱）を横にしてミンクの籠の上に置き、中にキャンプ用の小さなプロパン・ランタン（灯明）を入れ、採取した血液が凍らないように柔らかい粘土板に突き刺したガラスの毛細管をその中でそっと暖めながら、水鼻をすすり、凍える手で、ただ黙々と作業が進んだ。ミンクを掴む度に、臭い液体を掛けられ、富美子と私は頭の髪の毛の先から長靴のつま先まで、すっぽりとこの液体に覆われることになった。ミンクはイタチ科の動物で肛門の横に臭嚢に通じる小さな穴が2あり、緊張すると肛門に力が入り、肛門の周りの筋肉が臭嚢を押さえて、その穴からスカンクのような、悪臭の液体が霧状に飛び散っている。その臭いが4、5日なかなか消えない。抗体反応のある病気のミンクを殺し、病気のミンクのいた籠や巣箱は苛性ソーダ水溶液で全て洗浄消毒し、その年、残りのミンクはほとんど全部、余程資質の悪いものは別として、645頭の種ミンクとした。

スペース農場にいたときは、剥皮時期の後、私とロイが延々と氷点下15度以下の小屋の中で採血を毎日10時間続けた。大切なことは、取った血液サンプルとミンクが正確に合致

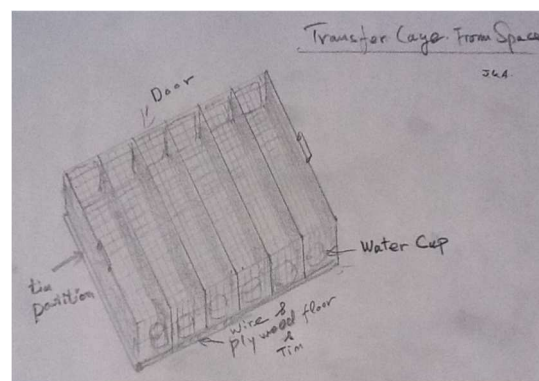
することで、正直で真面目な使用人しか、この仕事にたずさわれない。私は氷点下の寒さの中、苦しい程の臭さで辛かったが、フレッドたちに信用されて光栄だった。

秋になって、ミンクの毛替えが始まるにつれ、その毛色が非常に薄いことに段々不安になり、スペース農場のモイル・バフ・ミンクと異種交配し、質の良いデミバフミンクを生産することを検討した。私の話を聞いたアイヴィンが私を100%信用して、「一緒に、スペース農場から雄を50頭買って欲しい」と申し出て、我々は50頭の雄と30頭のメスを買うことにした。ミンクはユナイティッド航空でニューヨーク空港からシアトル空港まで直行便で来るようになった。「シアトルに着いたら直ぐに水をやるように」とラルフが言った。

「餌は1週間位やらなくても、この時期（冬期）のミンクは大丈夫だが、特に餌が貰えないと、エネルギー源として体脂肪を燃やすことになり、その際、水分が絶対に必要だ。ヴァンクーヴァー空港へ送ることも出来るが、国際線は着いた時、税関を通らなければならず、直ぐに水がやれず、税関に要する時間が税関次第で、通常、税関から出て来るのに時間がかかり、翌日になることもあり、君にはどうしようもない」と言った。米国内のシアトル空港まで自分の小型トラックで行って、随時水をやり、陸路を自分で運び、プレーンのカナダ税関を自分で通関することにする。この場合、税関で時間がかかっても、ミンクは自分のトラックに積んだままだから自分で常時ミンクの具合を見ることが出来ると言うのだ。

さすがにスペース農場は経験が豊かで、良い選択だったと思った。

当日、シアトルの空港まで行って、指定された飛行機便を待ち、ミンクを待つが、幾ら待ってもミンクは到着ロビーに出て来なかった。1時間程して、ミンクが間違って、ロスアンジェルス空港へ行ったことが分かり、航空会社の人が慌てて、ロスアンジェルス空港でやるべき注意事項を熱心に聞きに来た。夜まで6時間程待って、やっとミンクが着いた。





輸送用籠は立派な物で、平たく、小さな細長い仕切り部分 が 5、6 個、並列にあり、ミンクがやっと横に転がって寝 返りの出来る程に、またお互いに喧嘩しないように、左右 をブリキで仕切り、各々に小さな水飲みカップが入っていた。小さな個々の仕切り部分は、オスで 8 インチ X 8 インチ X 18 インチ、メスで 6 インチ X 6 インチ X 18 インチだった ようだ。ミンクが糞尿や飲み水で汚れないように、床の金網 の下 1 インチ程離れた所 に、もう 1 段板とブリキで作った底がある。この底があるために、何段にも重ねても 汚物は散らからず、各々のミンクも床も汚れない。スペース農場は以前から、カナダやヨーロッパやロシアへ何度も種ミンクを送っており、実にプロフェッショナルで見事であった。種ミンクが高く付く訳である。

結局われわれの種ミンクは航空会社の考えられない不手際にもかかわらず、1 匹も死な ず、素晴らしいものばかりであった。後ほどフレッドが、「あの時、ジミーに送ったミンクは全てスペース農場の種ミンクの兄弟姉妹だった」と述懐した。あの時、クレート（輸送用ミンク・ケージ）には名札が付いていて、アイヴィンのオス 50 頭と私のオス 50 頭とは、こちらが指示していないのに何故か別々に区別されていた。朝、スタンの白人使用人達が飼料調理場に来て、近くの 3、4 軒のミンク飼育者達の餌 を作った。前日の夕方までに、自分の必要と思うメニューをスタンに電話しておく、タフスタンが必要な材料を冷凍庫から調理場に出し、次の朝、半解凍の材料をメニュー通りチョッパーですり潰してドラム缶に入れてくれた。毎朝、飼育者達はそれぞれ小型トラックでそれを取りに来て、次の日のために同数の空のドラム缶を置いて帰った。しかし、当然、餌には質の良いものと悪いものがある。冷凍する前にスタンの運転手が周辺の食品加工業者、

フィッシュ・パッカー、屠殺場、飼鳥類加工場、ハム製造業者、

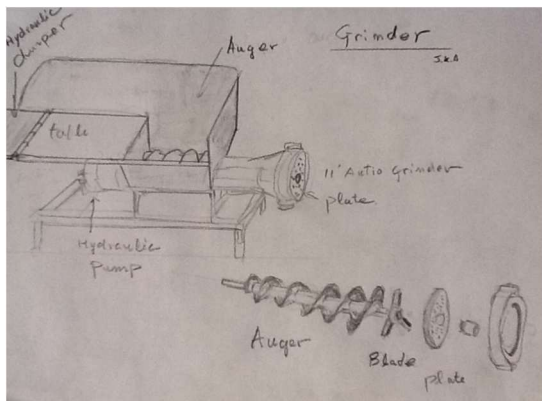
その他から集めて来るのだが、時間が掛っていて、温度が上がったり少しバクテリア・カウント（細菌個数）の高いもの、氷が十分利いていて実に新鮮なもの、長く冷凍してあって冷凍焼けしているもの、元々特別な酵素が入っていてミンクの餌として使えないもの等々、様々で、加工業者の機械の不測の故障がミンクの餌のバクテリア・カウントを 上げることもある。材料の質の良いもの、バクテリア・カウントの極力少ない、全てが「上質な刺身のような状態」で 1 年を通して自分のドラム缶に入るか入らないかで、その年の成績が大きく左右される。子ミンクが誕生して、成長して、冬毛がはえ揃うまで、7 ヶ月間、欲を言えば 1 度でも下痢をさせたくない。その 7 ヶ月間は完璧な刺身のような飼料管理、栄養管理と飼育管理が望まれる。

私が北米で唯一の日本人、アジア系のミンク飼育者で、スタンがアイルランド人、その他のミンク飼育者達は、カナダ人、オランダ人、ドイツ人、デンマーク人、ノールウェー人、フランス人、スウェーデン人、アイスランド人、フィンランド人、米国人が主流で、何か品質の悪いものがあったり、冷凍庫を持っている飼育者から配達の返品があったりすると、スタンのヘルパーは「ジミーにやれ」といった具合で、その悪い餌が私のドラム缶に混ぜて入れてあることに私が気が付くかどうか、興味本位にから かった。毎日、餌の材料の善し悪しを見極めるのが大変で、私と富美子はスタンの飼育場を借り始めた時から、朝、暗い内に飼料調理場に行き、スタンの使用人が来るまでトラックの中で待ち。私は、使用人の餌作りを手伝って、自分のドラム缶に入る材料をそれとなく確認していた。

それでも時々、チョッパーの刃の目を通る筈のない、古い大きな錆だらけの鉄製のポルトや、チョッパー（グラインダー）の折れた鉄製の刃の 1 部分が餌に入っていたりして、餌を給餌機でやっている最中に、給餌機のポンプが大きな音をたてて止まることがあったりした。給餌機のポンプは鋳物製ギア・ポンプで、何かが詰まると、その上にある。

タブ（餌入れ）に入っている、全ての餌（タブは 1000lbs—約 500 キロ用）を手で取り出して、その 1 番下にあるポンプを調べなくてはならず。ポンプのシャフトが曲がって、ポンプが潰れることもあり、チェーンが切れることもあり、チェーンを回しているギアが変形することもあった。すると、大切な時間とお金を使うことになった。私が困っているのを、誰かがどこかで喜んでいた。

スタンの飼料調理場にあるチョッパーは、オーティオ社製の 11 インチとワイラー社製の 16 インチのもの 2 台で、1 日の仕事が終わる時、水をざっと通す位で、分解して洗うことがなかった。私がスタンの飼育場を借り始めた時、朝、私の餌が最初に作られた。チョッパーの中で、1 晩中かかって腐った餌（タンパク質や酸敗した油脂を、私の餌で拭き取る結果となった。1 度、私がそれをスタンに指摘したことがあったが、「たいしたことない」と聞き入れて貰えなかった。私は 1 番若く、ミンク飼育場を借りる前には、こうなることに気付かなかったのである。朝、餌を取りに来る他の 3、4 人のミンク飼育者達は私が加わって、チョッパーの中の汚物を朝 1 番に拭き取って呉れることを残酷な興味を持って、当然、望んでいたであろう。無理もない。



また、チョッパーの刃が折れると、初めて分解することになるが、折れた鉄製の刃の1部や部品の中から、古くて極度に腐敗した餌やジュースが出て来る。分解したその時の塵位捨てれば良いのに、その危険極まりないものをうっかりしていると、私のドラム缶に放り込んだ。給餌機の潰れたポンプは何とか2、3時間奮闘しさえすれば直せたが、それより、餌に混ざった腐敗した毒物の方が気になり、残った餌に抗生物質を入れる位でどうしようもない。仕方なく、毎朝、誰よりも早くスタンの飼料調理場へ行って、スタンの使用人達が来る前に、大きな鉄製のチョッパーを1人で分解、洗浄することにした。それはとても重くて、体力と創意工夫の要る作業だった『自分の飼育場を早く持たねばならぬ』と痛切に思った。

ある朝、子供の通っている小学校のことで飼料調理場へ行くのが、2時間程遅れたことがあった。飼料調理場の中はきれいに片付いていて、スタンのヘルパーはコピー・ブレイクに行っており、誰もおらず、私の餌のドラム缶だけが広いコンクリート床に並んで見えた。近づくと、すり潰された魚が黄色くて、油揚げして臭かった。ドラム缶の奥の方まで手を突っ込んで調べてみた。何時もは、皆に少しずつ分けて使うのに、どうも私がいなかったものだから、まとめて入れたようであった。しかたなく、私は飼料調理場のコンクリートの床に魚のドラム缶の中身を全部ぶち空けて置いた。1時間程してからスタンの使用人の1人がおどおどしながら、私のいる裏のミンク場までやって来て、「ジミー、餌が出来た」と言った。きれいな餌だった。



スタン・シーヴスの1人息のリックが良譲と同年だった。小学校2年生の頃だったと思うが、休日になると毎朝のようにスタンと共に飼料調理場まで来て、すぐ、ミンク場へやって来た。体格が良く、素直で、いつの間にか良譲と淳子達に混ざって、私達の家族の1員ようになって、ミンク場の中で活発に走り回っていた。子供達は夜リック家へ泊まりに行き、リックは我が小さな中古のモバイル・ホーム(移動式設備、家具完備住宅)に泊まりにくるようになった。スタンの許可を得て、リックも一緒にシアトル市の宇和島屋まで日本食の買い物に行って、ついでに、シアトル観光して来たこともあった。

毎年4月に子ミンクが生まれて、ある程度生長して、籠の1インチx1インチの網目から落ちないようになる7月頃まで、籠の底には杉製の底板が入っていた。ある時、その汚れた床板を、ミンクの籠から取り出していたときのことだ。突然、側で子供達と遊んでいたリックがそのミンクの糞尿や腐った餌や汚れた寝わら、そして大量のウジ虫のこびりついた、臭い床板を素手でわしずかみに手元に引き寄せて、私達が用意して持って来ていたステンレス製のスクレーパーで掃除を始めた。

私自身まだこのような臭くて汚いものに接することに少し抵抗を感じながら、手袋をして作業をしていた頃で、ましてや、うちの子は近くにさえ寄って来ない。慌てて、リックに「それは汚くて、私の仕事だから、手伝わなくて良い」と言って、止めさせようとするが、彼はにこにこして、「ぼくは、気にしない、これが好きなのだ。」と云って、どんどん手伝いはじめた。

(将来、大物のミンク飼育者になる教育がすでに両親によってなされていた訳で、親父がミンク飼育者でミンクの餌屋と



言う好条件も手伝って、リックは親のミンク飼育場を 継いだ後、今では、ウェスタン・カナダで、最大のミンク飼育者になり、2007 年に会った時、「その年、年間総売り上げ約6 億円をあげた」と聞いて、自分の子のように一層 頼もしく思っ
て、嬉しかった。)

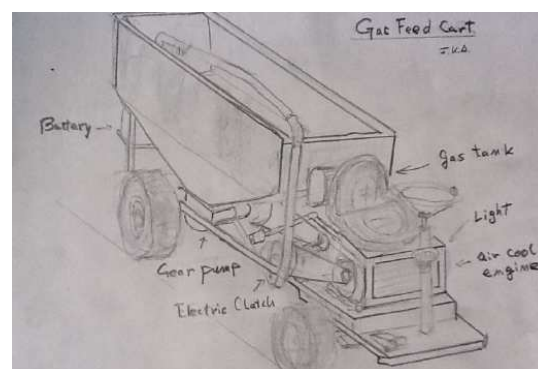
ペルティング(剥皮)シーズンが近づいたので、“使用人求む”の広告をヴァンクーヴァー・サン新聞に出し、1 ヶ月だけ新聞を購読することにした。白人のケンという大学出の感じの良い子が来たので、直ぐに雇うことにした。最初、大学で林業専攻と、言うので、「教育があり過ぎてミンク屋の使用人には向かない」と言うので、「林業は趣味で、実は、トラッパー(罠掛け猟師)が本職で、トラッパーを何年もしているので、ミンクの 剥皮はお手のものだ」と胸を張った。身長は私と余り変わらず、くすんだ青と白の中古のフォード F100、半トントラックで通って来た。

私達の借りているスタンの飼育場にはペルティング・ルームがないので、向かいのアイヴィン達に相談に行くと、アイヴィンとキャレンは、「今年、自分たちでペルティン をせず、我々のミンクを ビル・ボール剥皮乾燥サービス会社に出すことにしたので、ジミーは、うちのペルティング・ルームを使っても良い。使った電気代の実費だけ払ってくれば良い」と言って呉れた。

結局、アイヴィンたちは後程、我々の多忙な毎日を見兼ねて、每晚、延々と、私達のペ ルティングを無償で手伝うことになった。彼のペルティング・ルームはスタンの飼育場から道路を挟んで、距離にして 200 メートル位の所にあり、車で走ればそれ程不便ではなかった。次の日、私と富美子とケンとで早めにミンクのお世話を切り上げ、アイヴィンのペルティング・ルームへ行って、色々準備をした。夕方になってケンが帰る前に、富美子と一緒にミンクの水呑みカップに念の為もう 1 度給水に行った。私達が借りているスタンのミンク場の 1 部には、各々の ミンクの籠の列の外側に 1 個ずつアルミ製の水呑みカップ が取り付けられており、カップが 1 部籠の中に入り込むように作られている。籠のなかのミンクが水を呑む時、水は呑めるが、ミンク自身がカップに入り込めないように工夫されていた。通常、水をそのカップに 1 杯入れて置くと、24 時間は保つように出来ているが、ミンクの中には手で水を全部掻き出すものや、水呑みカップの中へ籠の上から餌をせっせと運んで来て水を汚すもの、糞尿をわざわざ器用に片足を上げ、その中に するものなどがいて、毎日何回か出来るだけチェックが必要だった。私達は近くの ローニーの所に、中古のモーパイル・ホーム(移動可能な住宅)を置かせ

て貰い、そこからスタンの飼育場へ毎日通っていた。そこで夜寝る前 11 時頃に、トラックに乗り、飼育場まで行き、富美子と 2 人で夜空を眺めながら、必ずもう 1 度水飲みの水の量の念を押しに行った。

スタンの比較的新しい小屋には、籠の外側の水呑みカップから 1 インチ程上に、直径 ハーフ(1/2)・インチの黒色の PVC パイプが通っていて、小さなががカップに向けて開 けてあり、小屋の端にある蛇口をひねると小屋の片側全部の水呑みカップに給水が 1 度 に勢い良く出来、汚物が流れ出るようになっていた。ケンが「自分の小型トラックで 行こう」と張り切って飛び出して行って、1 時間程経ってもなかなか帰って来ないので 気にしていた。しばらくするとケンが 1 人で息せき切って帰って来て、「運転を誤って、道路脇の溝に落ちたが、ミセスは大丈夫だ。トラックもただ突 っ込んだだけで、引っぱり上げて呉れれば大丈夫だと思う」と言った。



わずか 200 メートル程の、人の滅多に通らない我が家のドライブ・ウェイのような ところの運転で、事 故が起きるとは信じられなかった。ある時、ケンが給餌 機のオイルチェンジ をしていて、オイルフィルターを固定するブラケットのボルトに力を入れ過ぎて、ねじ切ってしまった。そのボルトは油圧走行装置のハウジングの蓋 を閉める多くのボルトの一本を共用していた。しかし彼はそのことを私に全く報告しなかった。その日の夕方、彼の働いていた辺りで私がその折れたボルトを偶然見つけて、それとなく聞いてみると、「そのボルトは、別段、なくても良い」と胸を張って宣言した。「大学でどんな教育を受けて来たのか。失敗したら直せなくても、少なくとも失敗したことくらい報告するものだ。率直に報告して、直し方を教えて貰えば良いことだ。大学でその位のことは習っただろう」と言うので、見た所いかにも育ちの良い端正な彼が、意外にも「そんなこと、大学では習わなかった」と嘯いた。「それでは、お前の家で両親から習わなかったのか」と聞くと、「習わなかった」と、しらを切る。「お前の両親は一体何者だ」と聞くと、「親爺は、某社の工場でナンバー2 だ。



母親は、ヴァンクーヴァー市のある会社のインテリア・デザイナーだ。母親は、毎日、親爺の会社の自家用セスナ機でヴァンクーヴァー市まで通っている」と胸を張った。「こんな基礎的な常識を全く教えていない親とは、どんな親か1度、彼らの顔を見てみたい」と言う、「そのうち連れて来る」と答えた。若い子の良くやることで、経験がないものだからボルトをどの位閉めて良いのか判らない。体が成長して力が強くなるのは良いが、残念ながらその力を微妙に必要且つ十分な調整する能力をまだ会得していない。

私は日本で自分で買った初めての中古ダットサンのオイル交換の際、プラグをレンチで締めながら、非常に緊張した経験を覚えている。



締め過ぎるとプラグかネジ山が潰れるかもしれない、緩すぎると走っている時振動でプラグがはずれ、オイルがエンジンから漏れるかも知れない。しかし、私はその時、オイル・プラグに使ってあった、銅のワッシャーの柔らかさを腕に感じ取り、ねじ切らなかつた。

それに、世の中の善悪の基準がややこしくなっているのかも知れない。私は『失敗』を報告するのは、世の中が変わったとはいえ、まだ当たり前だと思う。それとも、ケンはまだ知識がなさ過ぎたのか、経験がなさ過ぎたのか、自分のしたことを『失敗』とは思ってなかったようである。油圧装置のハウジングの4個あるボルトの1つがないと当然、力の配分がまずくなり、当座は良いようでも、必ず、ないボルトのしわ寄せが横のボルトに来て、ボルトか部品自体が金属疲労で潰れることがある。どうもカナダの大学の林業科では、金属疲労は教えなかったかも知れない。

我々の会話は、とうとう、ワシントン大統領の子供の頃の「桜の木のエピソード」にまで及んだ。ペルティング・シーズンが増々心配になった。次の日、ケンにミンクの殺し方を教えたが、すこし不器用に思えた。殺したミンクを各々の籠の上に剥皮のしやすいように、また、すみやかに腹から冷えるように仰向けで真っすぐに形を揃えて、1頭ずつ並べ、死後硬直を待つ。50頭準備が出来たので、それを1輪車に丸太を重ねるようにのせて、アイヴィンの剥皮室へと向かった。ケンは、いつもと違うことなので張り切って、てきぱきと身をこなしていた。いよいよ私がミラーズ社製の剥皮機を使って、剥皮の見本を丁寧に示し、5頭程、同じことを繰り返して見た。ケ

ンが1頭、剥皮機を使わず、スキニング・テーブルに向かって、自分の手で時間をかけてやって見た。乱暴で、不器用で、失敗が多いだろうが、まあまあ出来ないことはなさそうに思えたので、「今日は、私の剥皮機を使わず、スキニング・テーブルで、ゆっくりコツを会得しろ。剥皮のスピードは、明日以降だ」と言って、私と富美子はミンク場へ戻った。

其の晩、朝の1時から2時頃までに自分1人で剥皮出来そうな数のミンクを殺し、2時間位経ったので、丁度、その日から私に代わって給餌機で餌やりの終わった富美子と一緒に、ケンを見に行くことにした。ケンは汗をかいて頑張っていた。剥皮した毛皮をぶら下げて、直ぐに冷やすために用意してあった、ツウ・バイ・フォー(材木)に毛皮が20枚ほど掛かっていた。彼の出来上がった毛皮を1枚手に取って見て、私は反射的に青くなった。次の瞬間、『20枚で助かった』と思った。

やはりこの男は、オーバー・クウォリフ・アイ(教育があり過ぎ)で、向いていなかったのだ。ツウ・バイ・フォーに掛けられたベルトの頭がなかった。私の前でやった最初の1枚は私のように鼻まできちんと剥皮した。私がいなくなつてから、彼は自分で勝手に「頭は面倒だから要らないと思った」そうだ。本職のトラッパーならこんなことは絶対にしない。第1この後、頭なしで、どうやって油取りやボーディング(張り板張り)するのか少し考えれば分かりそうなのに。頭がなければ頭のない分と、その上、引っ張れないので、その分サイズが伸びない。今まで農師の出荷したものをオークション会社で何度も見ているが、このような頭なしのミンクのペルトを見たことがない。彼は、「林業は副業でトラッパーが本業だ」と言ったが、これでは林業もトラッパーも副業ということになる。一体、本業は何だったのだろう。

しかし、ケンはこの後2年ばかり、私達の農場に勤めていた。冬には1人で留守番をしたり、タコマのオークションと一緒に往ったり、比較的真面目な良い使用人だった。ある時、農場にあるモーバイル・ホームに住み始めた時、両親を連れて来て、「弟が高校を卒業して、大学教育の必要性を否定して困っている」と言っていた。彼の弟は大学へ行かずに、スキーの教師に成りたがっていたらしい。ミンク場の仕事もなれたある日、ガール・フレンドも連れて来て、突然、ヴァンクーヴァー・アイランドで、フォレスト・レンジャー(森林警備員)の職が見つかったからと農場を辞めて行った。

以後2、3回訪ねて来たが、ある時、突然アフリカへ旅立ち、それきりになった。1981年、私達のミンクが北米でトップ



になった後、ケンのガール・フレンドに電話を掛けて、彼の音沙汰を聞いてみたが「アフリカへ行った切り、全然、音沙汰がない」と、彼のガール・フレンドが、かんかん怒っていた。全飼育頭数の約半数病死 我々は、ミンク飼育場用地を探して回った。1 番容易な方法は、古いミンク飼育場か、フォックス飼育場か、ヌートリア飼育場か何かで、農業省の毛皮動物飼育場許可証を既に持っている土地を買うのが手取り早かった。ミンクを飼うには、州が定めた、毛皮動物飼育指定地区の中でなければならぬ。また、保健所の土壌検査に合格し、糞尿の処理の方法などは、市議会の承認を新しく得なければならぬ。色々な制約があることが段々と分かって来た。

当時、ミンク飼育者の組合長をしていた、レッジ・ハンブリーさんの奥さんが不動産販売員をしていて、アイヴィンから私のことを聞き付けて電話を掛けて来た。「手ごろな 20 エーカーの土地が売りに出ている」と言った。早速、午後に家族全員とケン連れて、見に行った。



ドイツ系の土地の所有者の奥さんが、「退職後夫婦 2 人でゆっくり楽しむために建てた家だが、娘が腸の腐る病気になってしまった。何度も手術を受けたが、この度、米国で娘がその手術を受けるため、この土地を手放さざるを得ない。娘の腸はこれまでに何回かの手術の結果、もう 30 センチ程しか残っていない」と心配そうに言っていたのを聞いて、私は直ぐ、その土地を買ってあげたくなった。

井戸が 2 つあるが 2 つとも浅井戸で、ミンク飼育場の規模のものではなかった。農業省の事務所に行って、地層を調べると、450 フィートものグレイシャー・マリーン(氷河に依る堆積土)という粘土層の上の土地で、水はあまり期待出来ない。我々は土地の所有者の許可を得て、とりあえず、白人の井戸掘削屋を雇い 450 フィートまで井戸を掘削することにし、途中 2 回塩水の層に当り、3 度目の水の層は「どちらかと言うと、ミネラル・ウォーターだ」と井戸屋が言った。私はなめてみたが良く判らないので、隣町のカス薬局に走り、硝酸銀を探した。その結果、塩素が相当検出された。井戸掘削屋は、私が何を求めて来て、何をやっているのか判らないようだった。

私が「もっと深く掘削して下さい」と指示すると、彼は心配になったのか、「これ以上深く掘削する前に、今まで掘削した分、8000 ドル余り、今払ってくれ」と要求しはじめた。ハンブリーさんと井戸掘削屋の決めた、初めの約束では、『ミンク事業用の水量と水質を見つけること』と、『何とか言う良い砂避けの高価なフィルターを井戸のパイプの先端に付けることが条件で、1 フィート 15 ドル』と言うことになっていた。彼等はまだ探している水を見つけていなし、まだフィルターは使っていない。しかも 8000 ドルでは計算が合わない。

しかし、ハンブリーさんは口をつぐんで何も言わない。彼女の思惑を紳士的にあれこれ憶測しながら、仕方なく金を払った後、井戸掘削屋が数フィート掘り進めて、「岩に突き当たったので、これ以上深く掘れない」と言い出した。私が判断に苦しんでいると、今度は土地の所有者が、「井戸掘り屋を雇って、2 つある深さ 20 フィート程の浅井戸の 1 つを、60 フィートの深さまで掘り進めた」と言う。現場に行ってみると、確かに水があり、直径 3 フィートの垂鉛のどぶすけした鉄製のコリゲート・パイプを入れていた。「全体の水の量は幾らですか」と聞いても井戸掘り屋からは、答えが直ぐに帰って来ない。私がインチをセンチに換算して暗算を始め、リッターをガロンに換算すると、彼はその場に座り込み、ポケットから手帳のようなものを出してチャートを見ながら計算し始めた。「それは何か」と聞いて見ると、長さの単位にフィートを使っていると、ガロンが暗算では直ぐに出て来ないことが分かった。

ハンブリーさんが保健所の役人を呼んだ。白人の彼は圃場の中程まで行き、つま先で 2、3 回草や土を蹴り、許可を出した。アイヴィンが「土地を買うには、どこからか金を借りるべきだ」と、クリア・ブルック町にある、農業信用組合というところへ私を連れて行った。農業信用組合の白人が私の話を聞いて、「お前のように金のある人には金は貸せない。ここは金のない貧しいカナダ人の農民を助けるところだ」と断られた。別に私は金があると言った訳ではなかったが、担保がなければ駄目だろうと日本的に思ったので、日本の家と文化住宅のことを話したのだ。

そこでこんどは、ハンブリーさんが国立商業開発銀行を紹介してくれた。数日して、国立商業開発銀行のランクレイ市支店の白人の係の人と、ヴァンクーヴァー本店の白人のテクニシャン(専門技術者)だという人が来て、スタンから借りている我々のミンク飼育場を隅から隅まであちこち見て回り、色々



質問をして、満足した様子で、「現在の運営状態と将来の計画と見通しを1枚の紙に書いて、私のところへ送りなさい」と言った。ハンブリーさんが気を利かせて、「私が書いてあげると言ってくれたが、辞退して自分で頑張る、書いて郵送すると、いとも簡単に借りられることになった。20エーカーの土地代が125,000ドルのところをハンブリーさんが頑張る、それから井戸代を値切って115,000ドル、ミンク小屋、その他最小限の設備費70,000ドル合わせて185,000ドル、16年間のローンで年13%固定利息だった。

その上に、運転資金のローンはアイヴィンが太鼓判押して呉れたので、アイヴィンの取引銀行、モントリオール銀行で貸してくれることになった。これは毎年冬に計画を立てて、子ミンクが生まれてから、何匹生まれたかを数えて、1匹につき10ドル借りて、毛皮が売れた後、毎年、全額返すことになっていた。我々は少しお金を持っていたので、その年、質的に非常に悪いミンクだけを毛皮にして、出来るだけ種メスを残すことにした。

出荷する時、毛皮の数が多いと、毛の色や質、長さや毛混み、艶その他が揃わない。1着のフルサイズのコートを作るのに、オスで最低40枚から、メスで60枚以上の同じ質の限りなく類似の毛皮が必要だ。もし欲を言えば、出荷するバンドル(束)がメスで150枚から240枚位で出来ていると、バイヤーの目を引くことが出来る。バイヤーはそれを買って3から4着のよりユニフォームな、すばらしいコートに仕上げる事が出来る。

私はミンク・ビジネスは複雑でかつ最高のやりがいのある『アート(芸術)』で且つ『サイエンス(科学)』であると思っていた。毎日、次々と起る不測な重大問題を次々と試行錯誤して解決して行くチャレンジにも生き甲斐を感じていた。いくら良い種ミンクを少量持っていて、出荷する時点で10枚や20枚の毛皮しか揃わないと、コート用の束が自分1人で組めない。人と組めば自然と、どことなく質や色、艶、毛の具合、革の質や厚さが揃ってくる。普段食べている餌、世話の仕方、血統、気候が異なるからである。オークションで良い値で買って貰うには出来るだけ同じ血統の良いミンクを数多く持たねばならない。

1部のミンク屋は自分なりの偏見に捕われた飼育方法を網出して、小さく凝り固まっていた。アイヴィンと私は工夫の上に工夫を重ねて、勤勉さと努力の限界にチャレンジして、どんどんミンクの数を増やした。1部のミンク屋は経済の原則が分

からないのか、嫉妬心からか、アイヴィンや我々を、数だけの粗悪大量生産で質の伴わないミンク屋だと即断して、軽蔑していたようだった。

土地を買うと同時に、高校時代の友達の沢田君を呼んだ。彼はどちらかと言うと、反抗的で、活発な学生であったが、同時に、よそ者で異端児であった私も受け入れてくれて、どことなく頼りがいがあった。

彼は高校を卒業後ベテランのブルドーザーの運転手になっていて、日本を立つ前からの約束で、土地を買ったら呼ぶことにしていた。彼は私のカナダからの誘いの電話を聞いた後、『ヴァンクーヴァー行き』を母親に相談したそうだ。彼の母親は直ぐに、馴染みの八卦見に走り、「1人息子が友達を助けるため、カナダへ行くべきか?」を聞きに行ったという。数日後、沢田君は八卦見の絶大な応援を得て、黒いサングラスをして、1人でさっそうとして、ヴァンクーヴァー空港に現れた。

ノース・ヴァンクーヴァー市のレンタル会社から、D-9ブルドーザーを1か月5000ドルで借りて来て、沢田君が杉の大木をどんどん押し倒し、平に整地した後、100フィートに付き1フィート下がる勾配を付け、正味500フィート(約170m)×250フィート(85m)整地した。こうして、500フィート×12フィートのミンク小屋予定地を10本のかまぼこ形に作り、ダンプ・トラックで川砂とピットラン(砂利の1種)と碎石をその上に撒いた。小屋と小屋の間は雨水排水のために低くしたのである。

雨が降ると整地作業は出来ないで、ホワイト・ロック市にあるサンドホフさんの古い飼育場に行って、古いミンクの籠を取り外し、自分の小型トラックに積めるだけ積み、我が農場に持ち帰った。勿論、沢田君も天瓶棒を作って、1回に4個の籠を運んで頑張っていた。

沢田君は1か月程いて、休日には家族一緒にヴァンクーヴァー市とヴィクトリア市を見物して回った。道路の『ゴミを捨てると\$1000ドル罰金』のサインに驚き、『テイク・ファイブ(5分間休憩)』と『カフィー・ブレイク』の英語を覚えて日本へ帰った。

サンドホフさんの農場には全部で2万個位の中古のシングルの籠があり、1個の籠に付き、1個の水呑みニップルの付いたPVCパイプ付で25セントだった。籠が1つずつで非常に手間と時間がかかり過ぎるためと、籠を小屋に吊る時、籠と籠の間にミンクがお互いに喧嘩しないように4インチ



ほど間隔を開けなければならず、出来るだけ沢山の籠を小屋に吊るには、籠が 8 個から 24 個 1 続きに出来ていて、隣同士の隔壁が 1 枚のブリキかプラスチックで出来ている、セクション・タイプと呼ばれていた籠が好まれていた。そのためどのミンク屋も欲しがらないのでシングルの籠が大量に残っていた。

しかし、私は新品だと 10 万ドル(1 千万円)は掛かる 2 万個の籠を、中古で手間が相当掛かるが、5 千ドル(50 万円)程で得ようとしていた。しかも、昔の 8 ゲージの金網は沢山亜鉛メッキが付いていて、最近のハイテクの器用に 1 様に薄くコントロールされているものと比較すると、耐用年数が全く違った。最近のものは、海洋に近いヴァンクーヴァー市近郊では空気中に塩分があるためか、餌に塩分を含んだ海の魚が多く使われるためか、10 年もすると錆て、穴が空き始めるが、私が得ようとしているサンドホフさんの古い籠はそれから 30 年過ぎた、今でもまだ使えるようだ。

まず、水呑みニップル付きの PVC パイプのワイヤ・クランプを、それぞれの籠からプライヤで外し、水呑みニップル付きパイプを巻き取り、2 本の釘をプライヤで伸ばして、2 × 4(横板)から籠を外した。サンドホフさんのミンク小屋は珍しく大きく、幾列もの籠が 500 フィートずつ吊っており、それが当然、他のミンク飼育者の興味を半減した。通路が狭いため籠を両手に 1 個ずつ持って、約 500 フィート、半ば、カニのように横歩きをして、小屋の外の小型トラックに積んで、500 フィート歩いて、又、元まで戻った。他のミンク飼育者が多忙だったのか、怠け者だったのか、分からないが、しかし、これが我々の力となり、次の年には確実に 2 万頭のミンクが飼えたのだ。この作業はミンク場の仕事が終わってから、暗くなるまで休みなく毎日やり続け、半年以上は掛った。

クリスマスの夜、サンドホフさんの家で賑やかにパーティーが始まったが、我々は青白い月光を浴びて、鼻をすすりながら、籠を運び続けた。子供たちも幼かったが、何とか駒ねづみのように走り回り、我々を助けて、何時も一緒だった。家に帰る途中、クリスマス・ケーキを買おうと、2、3 日探したが、その当時東洋人がまだ少なく、今と違って、ケーキ屋に日本のようなクリスマス・ケーキが全く売ってなかった。『クリスマス・ケーキは日本のように店で買う物でなく、家族で楽しく作ってこそ、意味が有るらしい』と子供達をなだめて、なんとか自家製のケーキを皆で作りはじめた。

籠運びが正月頃に終わった後、彼のアルミ屋根材も、屋根に登

って、釘を抜き 1 フィート当り幾らかで、全部貰うことにした。これで 2 万個の籠を入れる、屋根材も安く確保出来た。

ミンクに餌をやった後、ミンク小屋を建てた。ミンク小屋は、500 フィート(170m)×12 フィート(4m)のものを 10 棟建ててつもりだった。初めの 500 フィートの小屋は、元ミンク飼育者のローニー・スタンダーさんの古いミンク小屋を買い、自分達で潰して、古釘の出たままの古木やトラスを小型トラックに積んで、我が農場へ持ち帰った。ウクライナ人のローニーさんは 5 エーカーの土地に 120' × 12' の小屋を 5 棟持っていて、彼はアイヴィンの友達で、ミンク飼育場を止め建築業を営み、アイヴィンの新居は、彼が請け負った。勿論、彼も色々ミンク・ビジネスの親身のアドバイスをしてくれた。

霜が降り始めてから、少々困ったことがあった。ミンク飼育場用地を新しく整地したため、少し砂利を入れた位では、夜に霜柱のために土が浮き上がり、屋にそれが解けると柔らかくなって給餌機で走れなくなった。整地と同時に川砂とピット・ラン(砂、砂利)をダンプで 50 杯程、各々の小屋の通路に入れ、ダンプで 30 杯程の碎石をその上に撒いてあったが、特に小屋の出入り口が悪かった。アイヴィンに「何か良い対策がないか?」と電話してみると、その夜、トウライフが様子伺いに来て、昔話をした。「以前、従兄弟のライダが、君のように新しく整地して、その上にミンク飼育場を建設したが、最初の冬に、君と同じように、通路がぬかるんで身動きが出来なくなって、餌がやれず、終いに、とうとうミンク飼育場を続けられなくなり、今は、君も知っているようにアイヴィンの手伝いをしている」と言う。彼自身も、ニューウエストミンスター市で、伯父さんの飼育場を任されていた時、飼育場がピートモス(泥炭コケ)の上にあったため、降り続く雨で通路が膝までぬかるみ、餌の入った手押し車を片手に、別の片手で小屋の柱を掴んで引き寄せ、泳ぐようにして餌をやったそうだ。

800 頭余りの基礎ミンクならば、手押し車を引きずってでも、ぬかるみと戦えるが、当時我々は 1975 頭の基礎ミンクを持っていた。私たちはぬかるみがひどくならないうちに、冷凍庫建設用の材料として買った、厚さ 3/4 インチのベニヤ板を通路の入り口に敷くことにした。次の年、屋外の主要通路は日本から訪ねて来ていた富美子の実親父とともに、コンクリートにした。通路に敷いた、どろどろに汚れたベニヤ板はそのまま、冷凍庫の 6 インチの断熱材を貼るための内壁に戻った。

1978 年 1 月、その年 3340 頭の種ミンクを持つため、サ



ンドホフさんの所から持ち帰った、中古の大きな籠を繁殖用の籠に作り替えた。富美子と2人で、真冬の気温零下の夜12時過ぎに、裸電球を付けて、外で籠の山に埋もれて、黙々と修理作業をしていると、我が家の前を通行している人が車を止めてこちらを見ていた。20,000個の中古の籠を家の前の、家からよく見え、生えて来る草が短いところで、ドライブ・ウェーの直ぐ横で、小高くなった乾燥地に積み上げたのが失敗だった。家の後ろの藪の中にすれば他人に気が付かれず、良かったと気が付いた時は、籠運びが終わっていて、やり直すには2万個もあって、気が遠くなるようだった。しかたがないので、開き直ってそのまま家の前で作業を続けた。ひょっとして、夜わざわざ道に止まって我々を見て居た人は、ミンク飼育者だったかも知れない。多分、クレージーカ馬鹿だと思っていたに違いない。『極度の勤労は罪悪だ』と思って、非難気味に見ていたに違いない。

アイヴィンやスタンの飼育場は、海から車で20分、我々の飼育場はそれより僅かではあるが、東へ30分程内陸に入った所にあった。初めはその僅かな地理的違いが起す、気象的变化に気付かず、1976年の冬が来て初めて、試行錯誤の連続で慌てることになった。普段、干し草やステイドライ(サトウキビの乾燥繊維)入りのベニヤ板(厚さ5/8")製の巣箱(6" x 6" x 9")と、水飲みニップル付きの籠(18" x 18" x 36")の中でミンクは生きている。冬には籠の上にやった生餌が数分後に凍り出し、それを食べようとすると、ミンクが猛烈に網目越しに喰いついたり、手で引っ掻くものだから、網に完全に凍り付く暇もなく凍り始めた餌が網から遊離して、ころころと大きな厚い餅のように網の上を転がり、1日分の餌の3分の1も食べ切らない内に、籠の下に汚物の堆積した地上に落ちてしまう。それを防ぐために、私が餌をやった後、富美子が自家製の本で作ったコテで、餌を平たく網に押さえて回った。

私がミンク場全体の餌やりを終え、給餌機を暖かい飼料調理場に格納し、コテを持って富美子のいる所へと急ぐと、押さえつけることが出来ない位餌がもう固くなり始めていて、給餌機で直線的にやった餌の列が籠の上でばらばらに動き始めていた。転がりはじめた餌がまだ籠の上にあるうちに、慌てて2人でそれを拾って、籠の扉を開け、籠の中へ投げ入れた。寒さが一段と厳しくなると、餌にお湯をいれて、スープを作り、スバウトを編目に押しつけ、直接巣箱の中へ給餌したりした。

我が家には2つの井戸があって、1つは我々の住宅用で、家の南側凡そ50フィートの古い地下貯蔵庫の中にあった。も

う1つは飼料調理場から200フィート程北に離れた、吹きさらしの干し草用地の中程の小さなポンプ室にあり、ミンク場までは500フィート程北にあった。暖かい井戸水をくみ上げ使っていたが、ある夜、吹雪の最中に停電になり、ミンク場用井戸のポンプ室の確保に悪戦苦闘した。4キロワットの重い発電機を飼料調理場から引きずって、持ち込み、何とか電源を確保、加熱ランプをつけた時は遅すぎて、翌朝、圧力タンクや圧力センサー、真鍮製の逆止弁が凍って破裂、井戸水をポンプ出来なくなっているのを発見した。

元ミンク飼育者の井戸屋のエド(ポンプ)親子が吹雪の中、直ぐにやって来てくれた。自分が昔ミンクを飼っていたため、ミンク飼育者の切羽詰まった気持ちが良く分かるのだ。氷まみれになって頑張り、ポンプ室までは水が出るように修理してくれた。仕事だとは言え、極限の寒さや冷たさをものともせず、嬉々として、働くカナダ人親子に感動したのを覚えている。その後、我々も彼等に見習い、地中で凍ってしまったパイプを500フィート程井戸からミンク場まで嬉々として掘り起こし、凍ったパイプを飼料調理場でその夜解凍して、3フィート程の地中に埋め変えた。立ち上がりパイプには排水口付きの止水栓を使い、地中から電気のヒーティング・ケーブルを巻き、ニップルへ給水しない時は少量の水を止水栓から流しっぱなしにした。水圧調整弁は木箱で覆い、裸電球を入れ、水飲みニップルにも1部ヒーティング・ケーブルを添えた。

風のない天気の良い日は、気温が零下でも、朝の11時頃1気にミンクに給水し、日和が弱まる午後3時頃給水を止めた。早めに小屋の端の方でパイプの水抜きを始めないと、パイプが氷のため破裂してしまう。ミンクは朝、パイプに給水を開始すると、水の匂いか、その流れて来る僅かな音を聞き付け、夫々の凍ったニップルを辛抱強く嘗めている内に水が出て来ること、又、水は出ている時に満腹飲まねばならぬことを、学習することとなった。曇った日や強風、吹雪の日は、氷を作っておき、氷のかけらを籠の中へ数個宛投げ込んだ。――試行錯誤

気温がうんと下がり出すと、乾いた氷ではミンクに負担が多くなり役立たなくなった。給餌機が途中凍り付かないように生温いお湯を入れ、籠の中のミンク目がけて放水して走った。ミンクや籠に掛かった水は瞬時、氷の粒になり、ミンクはその新しく、みずみずしい氷を嘗めて生き延びた。厳しい寒さは、冬の間、長くて1~2週間ずつ位の繰返しで、大抵のミンクは元気だった。極端な時は巣箱へ直接水をいれた。ミンクが喜んでそれを腹1杯呑み、巣箱で凍った水は、寒波の内に昇華してしまって、何ら問題はなかったようだ - 試行錯誤



巣箱のサイズも色々だった。通常、1 匹用(毛皮用)は繁殖用より小さかったが、勿論、巣草の上で丸くなって寝たミンクの毛先が巣箱に直接触れない程度の大きさが必要だと思った。勿論ミンクと巣箱の間にはきれいな巣草が充分あるべきである。繁殖用のメス親用は、通常それよりも大きい箱が使われていた。メス親が巣草を詰めて、沢山子供を産み、育てるために、小指サイズの生まれたばかりの子ミンクを親が踏みつぶさないために、広い箱が要ると思いがちである。

しかし、ある時、試行錯誤のあげく、むしろ繁殖用の巣箱は小さな方が良いように思えて来た。出産にも個体差があって、親が元気で、出産が容易で、4 匹から 14 匹の子ミンクを完全に把握して、世話が出来ると、出産に相当時間がかかり、親が疲れ、常時 自分の子ミンクがどこにいるか確認、管理出来ない親がいる。巣箱が小さければ、我々の小指程のサイズの、毛のない子ミンクは、親の体から離れにくく、活発な子ミンクが四角い巣箱の隅の方で迷子になり、冷たくなならない。親の体の重心から毛先までには、我々が簡単に想像出来ない程充分な距離があって、子ミンクを踏み潰す心配はない。しかも、毛先に子ミンクが触れている鋭敏な本能的な感覚は、毛のない我々人間の想像を遥かに超えるように思えたのである。

電球が良く切れる。どうしてこんなに切れるのか? 全く考えられない。スーパーマーケットで何度も電球を買うが、日本でこんなに電球を買った記憶がない。ショッピング・カートに 1 ダースか 2 ダースずつ電球を買って帰る人が多くいて、これでは電球メーカーに上手くやられて、消費者は奴隷みたいなものだ。勿論、この国の家には、日本の家より部屋数が多くて、必要な電球の数も種類も多いのがわかるが、それにしても、北米の電球の品質管理が全く貧弱か、それとも意識的にうまく貧弱に作られているようだ。腹が立つ程切れるが、電球が悪いのか電力会社が悪いのか分からない。ひょっとすると、電圧が 1 定していないせいかもしれない。普通の電球だけではない、蛍光灯もこの国のものはすぐ悪くなり、端の方が黒くなってつかなくなり、やはり、電力会社よりも電球メーカーが結託して、北米消費者を奴隷化しているのかも知れない。しかし、誰もそれに全く気が付いていないのが、全くばかばかしい。乾電池も充電式電池もやはり電球と同様で、日本の物と比較すると、すぐに寿命がきて、駄目になるが、これが経済を刺激しているとは、全く情けない。

ちなみに、先年(2005 年 8 月)孫達を引き連れて、1 ヶ月間、大阪へ行っていて、この箇所を読み替えている折、偶然にも、日本の NHK TV の DIY (Do it yourself) のプログラムで、1 人のゲストが、「風呂場の電球が、家の改築後 13 年後に切れたのだけれど、その電球のカバーの取り外し方が

わからない。どうしたらいいのでしょうか?」と質問していた。しかし、私は「カバーの外し方」より、寧ろ「13 年後に電球が切れた」ことに、私の主張の証言者を見つけた思いで飛び上がった。すると、驚いたことに、その番組に出席しているもう 1 人のゲストが、間髪を入れず、「家を新築してから 17 年も電球が切れないので、替えていない」と証言し出した。これを聞くと、私でなくても、こちら(北米)の電球は少しへんでしょう? エド・ホーガン、カナダ人の兄弟が出来た。最年長で、後程、「ミンク飼育者終生会員」に成ったミンク飼育者で小柄のエド・ホーガンさんが良く現れた。彼はアイスランド系で、年若い母親との 2 人暮らしで、同じ 40 エーカーの敷地内に、2 歳年下の弟、ポール夫婦とは別々の家に住んでいた。ポールとエドは 2 人で 500 頭程のブラック・ミンクの基礎ミンクを持っていた。姉はアイスランド大使の奥さんで、ポールの息子はアルバータ州、レッド・ディア市で、日本の商社住友の弁護士をしていて、エドとはどうした訳か気が合って、うちの子供たちに自分のことを「アングル・エド(エド伯父さん)と呼べ!」と言ひ。「お前達には、伯父さんが近くにいないから、俺がお前達の伯父さんになってやる!」と、夕方になると必ずタイミングのずれた赤い小型のボンコツ自動車で行って来て、我々が働いている手を止めるまで、側に座って辛抱強く待ち、後程、コーヒーを飲んで喋って帰った。彼は結婚しておらず、母親と 2 人だけで寂しかったのかも知れない。

もしかして、90 才になるお母さんが許してくれないので、食後うちまで来て、タバコを吸いたかったのかも知れない。ある日、我々が遅くまで掛かって、飼料調理場で 200 トン容量の冷凍庫を作っている時、タールで黒くなっている私たちを横で見ながら、「本当にローマは、1 日では築けないなあー!」と神妙に独り言を言っていた。彼は、元学校の教員で、我々が買っていた雑誌を読むのを楽しみにやって来たのかも知れない。「今いるミンク・ランチャーの中で本を読むのは俺とお前位だ」などと、読ませて貰ったお礼に、お世辞を言っていた。突然、ミンク飼育組合から、「重大事項でミンク飼育者の会合がある」と、言ってきた。その日のよる、急遽珍しく 44~5 軒ばかりいる会員全員が集まって、ゲスト・スピーカー、キジ飼育者、専門家、政府農業省の役人の話を聞くこととなった。

高麗キジを飼育して、以前から日本に輸出していた人が、「今回輸出したキジ肉から、日本の税関検査で PCB が発見されて、返品されて来た」そうだった。その後、そのキジ飼育者、専門家、政府の役人の努力で、そのキジの配合飼料に使われていた油脂が PCB に汚染されていたことが分かり、原因は『アメ



リカのモンタナ州にある動物油脂製造工場の敷地に放置してあった、電力会社の変圧器が朽ちて、中からこぼれ出した PCB が地下水に混ざり、その工場が地下水を汲み上げて、生産に使っていたために、結果、その動物油脂を汚染した。』ということだった。その会社の動物油脂は、ほとんどのアメリカの(ハワイやグアム島にも)州とカナダの州に出荷されていて、全ての動物の飼料に添加されていて、とくに養鶏飼料に多く使われていた。よって、『PCB はカナダとアメリカの全ての家畜に行き渡っている』と言っても過言でなかった。その上、家畜の副産物は殆どがリサイクルされて、動物油脂やミート・ミールやフェザー・ミールと加工され、再び家畜の餌となっていた。北米のミンク飼育者は、餌に全ての家畜の副産物を大量に使っており、特に、鶏肉副産物はミンクの嗜好性が高いため、ミンク飼料の脂肪含有量の大半を占めていると言えた。PCB はその性質上、動物の脂肪組織に蓄積する。したがって、我々は家畜病理専門家から予想されるミンクへの被害についての報告を聞いた。最悪の事態ではミンクが死ぬかも知れない。我々の数年の努力も、大切なラルフ・スペースの種ミンクも、我々のカナディアン・ドリームも、全部失うかも知れない。我々ミンク飼育者達は全員、抜け出すことの出来ない重大な負債を負うことになるかも知れない。直ちにミンクが死ななくても、秋にはミンクの毛が抜けるかも知れないし、抜けなくても、毛が、みすぼらしくなるかも知れない。次の年又は次の数年間ミンクの子が生まれないかも知れない。ミンクの体調を整える冬にはミンクが体脂肪を燃や始めて、体脂肪のなかに蓄積された PCB が血液内に凝縮されて出て来て、その時、中毒死するかも知れないと色々心配させられた。

しかし、1 番私の記憶に残っていることはミンクのことではなく、その場に出席していた役人が、「今、カナダ国内の市場にある(間違いなく PCB に汚染された)畜産物を、一般の人に食べて貰おう」と言ったことであった。「ここに集まったミンク飼育者は、他の消費者にこのことをしばらく黙っていてくれないか。カナダは農業大国で、君らはカナダの農民だ。もし皆が食べないと、君たち農家も国も困ることになる。皆で少し宛食べれば大したことはない」と言うのだ。私がそれに驚いて、「この国の PCB の食品汚染の安全基準はどの位ですか」と聞くと、彼は「0.03ppm だ」と言った。私は以前、日本にいた時の米ぬか油の PCB 汚染を覚えていて、確か日本の工場排水の安全基準が 0.003ppm だったと思ったが、その夜直ぐ、日本の千寿製薬会社の研究室を任されている、姉に電話して、この数値の確認を取った。PCB は簡単に体外へ直ぐ排せつされる毒物ではない。

皆で少しずつ食べたとしても、PCB は我々の体内の脂肪組織に間違いなく蓄積する毒物である。少しなら良いとは言えない。この時、私がいくら PCB の危険性に付いて説明しても、誰も私が PCBs の知識を持っていることを認めたがらなかった。専門家は、変な目つきで私を見、トーライフは、「ジミー。お前は何か別のことと混同しているのだろう」と言った。「国民に黙っていてくれ」と聞いた時、複雑な気持ちになった。アイヴィンもトーライフも他の飼育者も自分達のミンクのことで、頭が一杯になっていた。誰もが、ミンク・ビジネスに全精力をついやしていた。我々も今さらミンクを止めて、日本へ帰れない。『屯でもない国へ来てしまった!』と思った。我々はその年、出来るだけ魚を食べるようにした。特にチキンは全く食べなかった。スーパーマーケットで沢山の人が肉やチキンを買っているのを横目で見るたびに複雑な気持ちになって心が痛んだ。

テレビのニュースでその真実が発表されたのは、それから相当後で、しかも、1 瞬だった。汚染された畜産物が消費されてしまってから、報道されたのではないかと思った。その年、うちのミンクは魚類と穀類で生きのびて、秋には大きなミンクに成長したが、毛はあらあらしく皮は分厚く重かった。しかし、これは、餌の栄養バランスが崩れていたもので、PCB のためではなかったと思う。今、結果論から言うと、いろいろ専門家の知識に脅かされて、夜も眠れぬ程悩んだのは少数の我々ファーマー達で、別にミンクが死んだ訳でも、毛が顕著に抜けた訳でも、出産率がそれ程悪かった訳でもなかった。後程、全ミンク・ファーマーのその年の出産率が僅かに落ちたと報告があったが、魚と穀類の餌を食べた我がミンク場の出産率には影響はなかったようだ。一般大衆から PCB による病人が出たり、体調不調者が出たとも聞いていない。

勿論、PCB 問題が報道されても国民がパニックにならずに、国民の健康的にも、精神衛生的にも、経済的にも、社会的にも、ダメージを最小にまとめ、何事もならずに済んだ。大局的に見て、このときの政府のダメージ・コントロールは見事に成功したようである。担当役人の中には我々同様、そのコントロールに奔走し、ぎりぎりの決断に命を賭けた人がいただろう。そのマニュアルがある筈で、日本のように新聞にどんどん書かれ、メディアにどんどん放送され、誰もが専門家なみの意見を吐き、噂が 8 方に 1 人歩きし、心配しなくても良い人まで心配しなくてもよかったことになる。この点が日本と異なるカナダのずば抜けて、1 歩進んだ冷静な所と言えるだろう。しかし、1 歩間違うと大変なことになる。間違わなかったことに賞賛する意義がある。マニュアルがあれば見てみたい。ヴァンクーヴァーからカール・鈴木さん夫婦が訪ねて来て、ヴ



アンクヴァー島のシドニーの波止場で釣った、パーチ（魚の名前）を 3 枚に下ろして、サランラップで包んで冷凍したものを、「刺身にしない」と言って沢山くれた。自分で採った岩のりに味を付けて天日で干したのも、「日本人にはのりが欠かせない。知っているかい」と言い、沢山持って来てくれた。ある時、ヴァンクーヴァーで日本人が豆腐を作り出したからと、豆腐も持って来てくれたこともあった。「今から、ハリソン湖へ行って、真鯉を釣りに行く」と言い、「次の週、良譲とイングリッシュ・ベイでサーモン釣りをやろう」と言うことになった。彼らは 10th に住んでいて、自宅から小さなボートでちょっと海に出たところで、バラード・インレットだったかも知れない。自慢のサファイア・ミンクの飼育者、ワイサイトさんが我々のミンクを見に来た。挨拶をしながら小屋に入って、我々の雄のミンクを 1 眼見た瞬間、何も言わずにすっ飛んで帰って行った。

それまで、他の数軒のミンク飼育者達のように、餌を擦り潰して貰ったものを、毎朝餌屋のスタンの所へ取りに行っていたが、自分の農場に 200 トン(2 部屋)の冷凍庫が出来てから、自分で餌を手配して貰えるようになった。餌屋のスタンの機嫌を損なうことは明白であったが、彼が契約していない比較的小さな米国の魚の加工会社や畜殺場、近くのハム会社等が私の餌の仕入れ先となった。冷凍機はコウブランド製で 5 馬力のものが 2 基。ミキサーは、アイヴィンの古い 8,000 パウンド(約 4t)容量のミキサーを買い、トレーラーに作り替え、冷凍庫の完成するまで、毎朝スタンの飼料調理場へ小型トラックで牽引して、通っていた。ミキサーの原動力は土地を買った時、その土地に付いて来た、古いケース・トラクターのピーティーオー(動力取り出し装置)を暫く使っていたが、冷凍庫を作ると同時に、600 アンプの三相の商業用電気サーヴィスを飼料調理場へ引き、ミキサーは 1 時 10 馬力の電動にする。自分で餌をすり潰すためにグラベルさんから相当使い古した、オーティオ社製のチョッパー(11 インチ)を譲って貰って、新品のアーガーを取り寄せ改修して、油圧装置仕様に変えた。油圧パワー・ユニットは 30 馬力と決め、無論、ミキサーも同時に油圧仕様にした。45 フィートの保冷用のヴァンを買って、これもコウブランド製の 10 馬力の冷凍機 2 基を付け、急速冷凍庫も飼料調理場の横に作った。

勿論、スタンからは魚とチキンを送り潰して、冷凍した物を取り寄せたが、どうも、チキン、それも主に鶏の内臓が気になった。餌を食べたミンクに「チキン・リング」が毎日数件発生し始めた。実際は材料がチキンではなく、チキンのものより太い七面鳥の気管の輪切りになったものだった。丁度それが、指輪が指に入るように、ミンクの細い舌の根元まで入り込み、

舌の血液の循環を妨げる。気が付くのが遅れると、ミンクの口から何倍にも黒く上がって腐った舌がぶら下がる。ミンクが自分でその輪を取ろうとして、両手の爪で掻くものだから、腐った舌がずたずたに切れて、とても見ていられなくなる。

「チキン・リング」のミンクは発見が遅れると、殆ど 100%、舌が腐って死んでしまうことになる。スタンに「先日、配達して貰った 10 トンのチキンは七面鳥ではなかったか」(ユース・ファー・ランチャー誌による)と念を押すが、「確かにチキンだ」と言い返す。毎日、数匹ずつ成長の良い雄ミンクが「チキン・リング」で死んで行った。チキン・リングの発生から 4、5 日遅れて、見た所、成長の良い、健康そうな雄ミンクが朝突然血を吐いて、数匹ずつ死に始めたので、直ぐに、農業省の検査場に死んだミンクを検死のため持って行った。診断は「スドモニャス肺炎だ」と言われ、サルファ剤(サルファ・サイアゾリ)を使った。文献(US FUR RANCHER 誌)に依ると、この病気は冷凍期間の短い七面鳥で良く起こったので、やはり、七面鳥だと思ったが、スタンは、「チキンだ」と言い張り、「頼むから、違うバッチのチキンが欲しい」と言っても、「チキンの在庫は今、ない。お前のとこの水が悪いのだ」と譲らない。確かに水でスドモニャス肺炎になることもあるから人は言っていた。

しかし、スドモニャス肺炎の菌は水の中で繁殖するかも知れないが、汚染された餌が最初の原因のように思えた。観察する内に、我々の給水設備も不完全に思えた。我々が使っているオランダ製の水呑みニップルは子ミンクが鼻で押して、呑みやすいように、スプリングが弱く作ってあり、しかも、適正水圧は水圧調整弁を使い 2、3 パウンド/スクウェア・インチ(150gr-200gr/平方 cm)に調整されていた。1 本のパイプに沢山の水呑みニップル(約 500)が付いているため、小屋の奥の端の方のミンクが何匹か同時に水を呑むと、3/4 インチ径のパイプを流れる水量が追いつかず、小屋の前の方のニップルからパイプのなかへ空気を吸い込むことに気が付いた。病気に成ったミンクのニップルが空気を吸い込めば、病原菌は容易に給水設備で拡散する。このニップルや給水パイプは、ホワイト・ロックのサンドホフさんから買ったもので、サンドホフさんはミンク業を止める前、この問題で苦しんでいたのかも知れない。ひょっとして、我々がそれを知らずに、全てごっそりと彼の問題毎買い込んでしまったのかも知れない。スタンに言われた時、水的全システムをウォータースタンで消毒したが、一向に良くなりず、ミンクはどんどん 1 日に何百と死に始め、その年、剥皮作業が始まる頃には、収穫(11480 頭の半数以上が死んでしまった。毎日朝、富美子が前の日からのミンクが食べ残した古い餌を網の上からナイフで掻き落とし、餌をやる準備をしながら、ミンクの死骸を 1



輪車で集めて回るのだが、仕舞いには 1 日に 300 頭以上死に始めて、回収が追いつかなくなってしまった。

出産率が良かったため、1 つの籠にオス、メス 2 匹ずつ入っていると等々、富美子が働きながらその場に至るまでに、まだ生きているミンクが死んだミンクを食べ始めて、毛皮としても、傷物になり始めた。しかし、幸運にも、スードモーニャス肺炎は気温が零下以下になり、新しい冷凍チキンが入荷した後、収まり始め、剥皮作業が終る頃には、何とか死ぬのが止まって、その次の年、意外にも、スードモーニャス肺炎ワクチンが出来た。病気で死んだミンクのペルトは、発熱のため黒ずんだ発心が皮全体に出来るので、皮表の乾燥では直ぐにそれがバイヤーに分かるため、アイヴィンが「毛表の乾燥仕上げ業者に出す方が有利だ」と忠告してくれた。その頃、ミンク飼育者や餌屋のスタンの使用人の間では「ジミーは終わった。ジミーは沢山ミンクを飼い過ぎて、管理出来ず、もうジミーは全滅で、腹でも切るのは」と噂が流れていて、「腹切りが見られる」と期待していたらしい。スタン自身はチキンに七面鳥が混ざっていること（作業現場に居合わせなくて）を本当に知らなかったかも知れない。結局、我々がその年、身を以て、1 年前の業界誌（ユース・ファー・ランチャー誌）の記事の如く、「冷凍期間の短い七面鳥副産物の危険性」を証明した事になった。アイヴィンに依ると、ミンク飼育者の 1 人のグラヴェルさんが「皮表の乾燥」の他に、設備を新たに導入して、「毛表の乾燥仕上げ業」も始めたという。

早速、彼を訪ねて、我々のミンク毛皮の脱脂・乾燥仕上げ加工をピースワーク（1 枚に付き幾らか）でお願いした。幸い、種ミンクがスペース農場から導入された物なので、グラヴェルさんも、「病気で死んだにしては、お前のミンクは上出来だ」と誉めた。しかし、毛皮の加工が終わって乾燥した毛皮の数を当ると、グラヴェルさんに出した数 8734 枚より、戻って来たペルトの数がきっちり 500 枚少なかった。『500 枚少ない』と抗議すると、簡単に 500 枚彼のミンク（あり合わせのミンク）を返してくれた。それは私のミンクではなかった。彼は私が忙しくて数を数えられないと思ったか、彼の単純な間違いだったかも知れない。ある日、エド・ホーガンがぶどうの苗木を 2 本買って来て、「ピーターソン（スウェデン人）にも上げたのだが、お前の所にも買って来て、これをどこかに植えておけ!」と言った。ひょっとして、虫が知らせたのかも知れない。突然のことに、ビックリして、「どうして又ブドウを?」と俯いて、それを手に取りながら、灰色がかった青い目を下から見上げると、その目をしょぼつかせて、照れくさそうに、「安かったので買った。俺の形見だ」と、1 気に吐

き出すように言った。

この年の種ミンクは 3150 頭で、エド、ポール、ハンブリー、マリーさんから種ミンクを少しずつ補充した。その年 1979 年 1 月、全飼育頭数 12184 頭の内、8734 枚ニューヨーク市のハドソンバイ・オークション会社へ 6000 枚以上の死に皮も含めて全部出荷した。その当時、BC 州から、トロント市には出荷するが、ニューヨーク市まで出荷する飼育者は、余りいなかったようだ。「俺もニューヨーク市のハドソンバイに出している」とエドが言っていたが、他所の飼育者と組んでいたようだ。少なくともカタログには彼の名前がなかった。我々夫婦は、その年の出荷が大部分死皮なので、死ぬか生きるかの土壇場に立っていた。ニューヨークへ立つ前夜、私はまた、1 人で飼料調理場の屋根の上に登り、宇宙を見上げて、それまでの借金と家族 4 人のクレージーな努力と、これからの北米での生活を妄想していた。オークションを見に行く勇気が出るまで、数時間が経った。幸いにも、その年は偶然、ミンク毛皮の値段の良い年で、死に皮にもかかわらず、運転資金のローンを全部簡単に返すことが出来、おつりが沢山残った。

ニューヨーク在住の上物買いのバイヤーのアル・グリックマンさんが、我々の異種交配で出来るデミバフ・ミンク毛皮を競って買っていた。後で、廊下に出て来て彼を捕まえて、わくわくしながら、意見を聞いて見ると、「お前のミンクは質も色も良い。こんなミンクで、もっと大きなバンドル（束）だと魅力的なんだがー」と言った。「それなら来年、沢山このようなミンクを作るから、どうか、また買って下さい」と言うと、笑いながら、「そう簡単に出来るはずがない」と言った。「絶対に出来ます」と私は誓った。これまで数年間は、異種交配の結果がどうなるか解からないのと、純粋のスペース農場のミンクを増やしたかったので、トーライフから買ったミンクにはトーライフのオス、スペースから買ったミンクにはスペースのオスを使って、出来るだけ純粋のスペース系のミンクと、純粋のトーライフ系のミンクを別々に増やした。ほんの少しだけスペース系とトーライフ系のミンクの異種交配だった。次の年からは、トーライフ系の全部のメスに、スペース系のオスを、スペース系の全部のメスに、トーライフ系のオスを使うと思った。そうすることにより来年は、グレックマンさんの欲しがるデミバフ・ミンクが 1 万枚以上出来る計算だった。やはりオークションは見に行くもので、とんでもない戦略を思い付くものである。私は内心その場で両手を上げて、飛び上がりたい程興奮した。

次の日、富美子と私はエンパイア・ステート・ビルの屋上から、



‘鬼の首’を取ったような気持ちで、ワールド・トレード・センターを眺めていた。次の日からの迫り来る精神的、肉体的重圧を断ち切ることを出来る希望が、確実にどんどん大きくなって行くようで、実に嬉しかった。エンパイア・ステート・ビルディングの展望台には、数年前に東京のジョージさんとダンさん2人が百科事典の販売会社をやりながら、毎月ニューヨークのアパートメントに交代で泊まり込み、始めた記念メダル販売ビジネスの機械が、人の手に渡って、まだ数台あり、特別に懐かしくなって、子供へのお土産としてそのメダルを2個買うことにした。

オークションの後、日曜日があって、富美子と2人でレンタカーを借りて、ニュージャージー州のピーマーヴィルにある、スペース農場を久しぶりに訪ねることにした。フレッドは余り働き過ぎて、前の奥さんに逃げられ、新しい奥さんを買っていた。ラルフはエリノアと遺言を作り、子供たちが1つ1つ博物館の遺物を売りさばくのを防ごうとしていた。エリノアに依ると「全ての展示品を国に寄付し、博物館の運営権をスペース1族が握るようにする」そうだった。その日はフレッドの家に泊まり、翌日、皆でマス釣りに行った。オークションを見に行く飼育者は、私のような例外を除いて、1部の役員や大物の飼育者に限られていて、大部分の普通の飼育者は生活に追われて、わざわざ大都会のオークション会社まで出かけるのが億劫なようであった。

しかも、1年も掛けて銀行から運転資金を借りて、大変な苦勞をした後、まとめて毛皮を出荷してしまえば、後はオークション会社まかせで、ひたすら、オークション会社で公平で且つ最高の結果で売れることを望んで待つだけである。1部の大物飼育者を除いて、大部分の飼育者の間では自分の毛皮に印を付けることが‘おこがましい’風潮であった。ある時、スタンに、「オークションを1緒に見に行かないか」と誘って見た。するとスタンは、「ジミー、オークションへ行ったら、駆け出しのお前に何が出来るか。浮かれて、世間話をして、金を使うだけだ」と言った。私は『勉強の場』『戦略を練る場』だと思っていたが、そう言われて、ますます毎年欠かさず、どんなに忙しくてもどんなことがあっても、オークションには行くことにした。

確か良譲がグレード9か10(中3か高1)の頃、夏期休暇が連休かで、久しぶりに気分転換のため、自分のダート・バイクに乗って、農場の中を走り回っていた。そのとき、プロパティ沿いの西側の道路とうちのフェンスの間の側溝で、炎が上がっているのを見付けて家に駆け込んで来た。その辺りは袋小路で、人通りもなく、乾期で枯れた草やベリーや落ち葉がたまっていた、杉やメープルやアルダーの藪が覆い被さる水の

ない溝であった。しかも、その道の向かい側は今と違って、何もないサーモン・ベリーの藪のフェンスで、人の良い北欧系のロスさんの40エーカーの牧草地であった。直ぐに消防署に電話して、家族全員で青くなって大騒ぎして、その火を何とか消したが、消防車は来なかった。「連絡したのに、消防車がなぜ来なかったのか」と911番に後で電話すると「火は消えたか」と、冷静にどこかで見ていたように聞く。「消えたことは消えたが大変だった。来てくれないと困るじゃないか」と言うのと、「消えたならそれで良いじゃないか」と言われた。後で燃えかすから、裏のテューダー風の大きな屋敷に住む白人配管工事屋が家に帰る道すがら、車を止めて、配管工事に関する領収書や請求書のいらないものにまとめて火を付けたようだった。



当時、その辺りは古い大木の密集した森だったし、良譲が偶然見付けなかったら、夏の乾期で、森も、建てて間もないミンク小屋も、大切な世界1の種ミンクも、我々1家

のカナディアン・ドリームも全部燃えてしまったかも知れない。1979年、隣の20エーカーが売りに出て、元ミンク飼育者の白人不動産屋、ボブ・クエールさんが毎日のようにやって来て、「一般的に、何かビジネスをしていて、土地が狭くなって、隣を買おうとすると、なかなか思うような値段では買えないものだ。しかも隣の方から売りに出ることはあまりないことで、これは又とない絶好の『運命』だ。隣は150,000ドル欲しいと言っているが、親爺が死んで、子供達が分け前を早く欲しがっているようで、半分位をオファーしてみてもどうか。ヒョットして、承諾するかも知れない」と言って、笑った。



冬の最初のオークションの後、運転資金ローンを銀行に返して、100,000ドル位口座に残っていたので交渉を続けるように指示し、クロヴァーデールのうちの銀行へ行ったら、「隣の20エーカーを買いたい、買っても良いですか?」と恐る恐る聞いてみると、白人の口座マネジャーがいかにも嫉妬深そうな目をして、「駄目だ。まだ早い」とぶっきら棒に言った。2、3日仕事をしながら、あれこれ考えていたが、彼の突き放すような‘嫉妬深そうな目付き’の方が、隣を買うことより、段々と心配に成り、近くの別の銀行へ行ったら、自己紹介し、ミ



ンク・ビジネスを説明し、今、直面している私の関心事のことを色々説明して見ることにした。「口座を全部うちに替えてくれるなら、隣を買うことを応援する」と言ってくれた。

<余白>

ポブ・クエールさんが交渉成立を告げに 来て、「ジミー、半額



の75000ドルで、盗むような値段だ！」と、ポブは喜んで いた。我々は利息なし、3 年払いでその 19.75 エーカーを買うことにし、これまで 作業用小型トラック 1 台で、汚れたり、荷台もドラム缶の重さで変形して

来たので、その年、大型から中型にモデルチェンジされた真っ赤なフォード・サンダー・バードもついでに買うことにして、チェックで払 った。

しかし、現実には、毎日が忙しくて サンダー・バードに乗るチャンスがなく、カーポートでほこりを被っていた。ある時、昼飯を食べた後、まだ、口を動かしながら、1 人でミンクの餌の脂肪率をしらべながら、サンダー・バードをワックスで磨いていると、サンルーフの前の屋根の部分 に変な黒い点々があることに気付いた。ワックスを多く刷り込むが、変化なしだった。その年は車を整備に持って行けない程非常に忙しく、年が明けて、ミンクの頭数が少なくなってから、フォードの販売店に行った時は、まだ新車を買ってから 1 年も経っていないのに、黒い点々のところが大きくさびてコイン程の穴が幾つか開いていた。それを見た白人の販売店員は、「フォード・カナダ社へ行け」と、どもり気味に言った。2、3 日して、やっと暇を作ってフォード・カナダ社へ行くと、白人男が出て来て車の登録証を見て少し考えていたが「昨日が 1 年目で、保証は 1 年しか利かないから、悪いねー」と言って、ニタリと無理矢理笑顔を作って、事務所に帰ってしまった。以来、フォードは絶対買わないことにした。子供たちもそこに同席していたので、私に遠慮してフォードは、以来、買っていない。カナダへ来て以来、フォードを買い始めたが、2 台目を買うまで、その悪さが身にしみなかった。それから数カ月して、フォードのテレビ・コマーシャルが、突然、「品質ナンバー・ワン!」「品質ナンバー・ワン!」と連 呼していることに気が付いた。

.....





6. 事務局日より

- ◎ 会員の皆様におかれましては、お元気にお過ごしのことと拝察いたします。
5月8日から、コロナウイルスも5類対応となりましたが、ウイルス自体は存在しておりますし、医療体制も十分とは言えない状況です。引き続き罹患にはご注意ください。
- ◎ 次号のジャーナルは秋口を予定しておりますが、皆様のジャーナルへのご寄稿をお待ちしております。
ご寄稿内容は紀行文、写真、絵画、イラスト、俳句、川柳、短編小説、などなど制限はございません。
また、常時受け付けております。事務局あてのメールにてご寄稿ください。
ご不明点などございましたら、遠慮なくお問い合わせください。

《関西支部からのご案内》

1	MK 会 講師 麻殖生健治氏(立命館大学大学院教授) 演題 「遠野物語と交渉」 日時 2023 年 4 月 27 日 会場 ベルウッド 参加費 1,500 円	4	リタイアメント作品展同窓会 日時 2023 年 6 月 21 日 会場 ベルウッド 参加費 2,000 円
2	リタメン会ゴルフコンペ 池田カントリークラブ	5	講演会 講師 熊谷貞俊氏(大阪大学名誉教授) 演題 未定 日時 2023 年 7 月 5 日 会場 ベルウッド 参加費 1,500 円
3	講演会 講師 佐藤宏道氏(大阪大学名誉教授) 演題「脳とこころーものを見ることー」 日時 2023 年 5 月 31 日 14:00~16:00 会場 ベルウッド 参加費 1,500 円		



発行：特定非営利活動法人 リタイアメント情報センター（R & I）

〒100-0011 東京都千代田区内幸町 2-2-3 日比谷国際ビル 18 階

ヴィップシステム(株) 内

●TEL 03-5860-9483 FAX 03-5860-9477

●事務局 E-mail : toyoguchi.k@gmail.com

●HP : <http://retire-info.org/>

（発行責任者） 事務局 豊口 一美